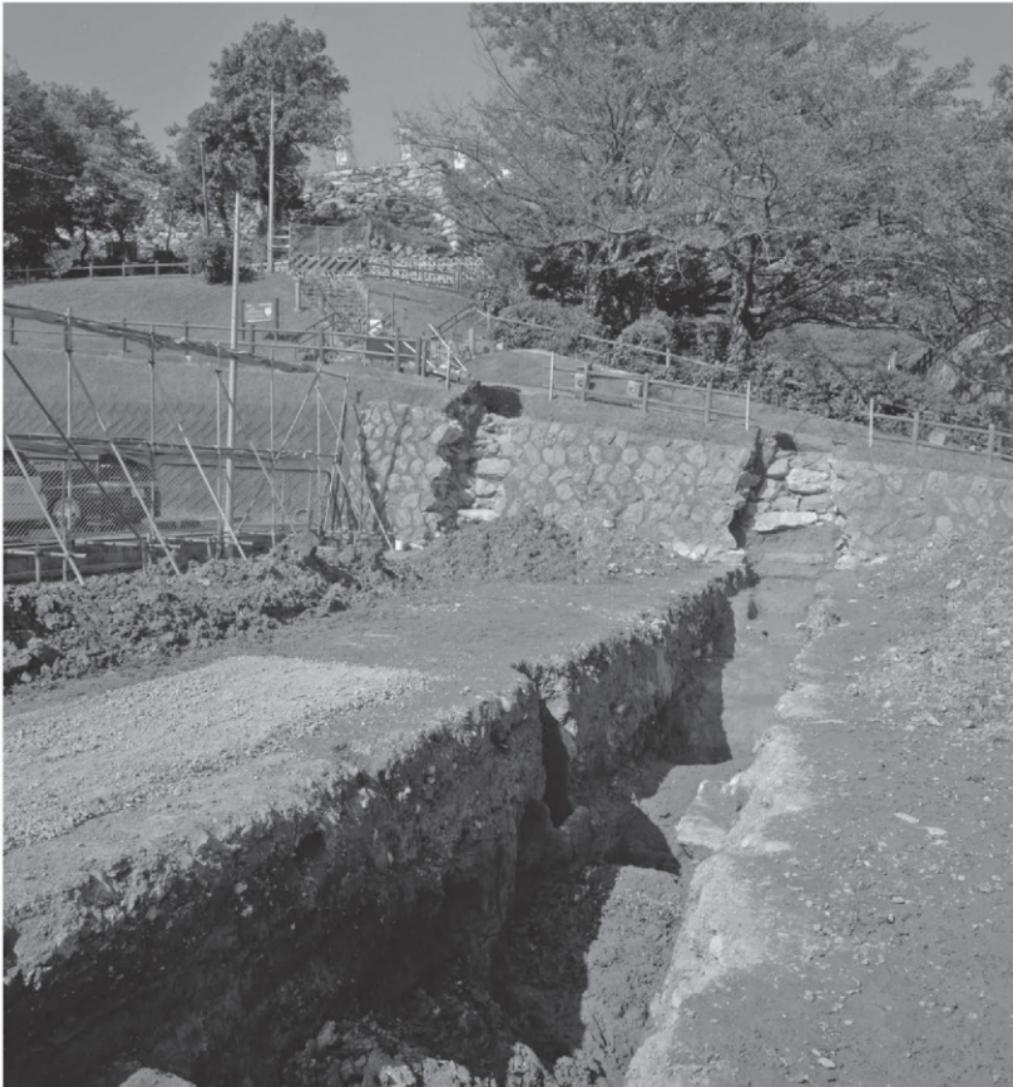


浜松城跡 10

2015年3月

浜松市教育委員会





# 浜松城跡 10

---

HAMAMATSU CASTLE

The 12<sup>th</sup> excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2015

浜松市教育委員会





3・6 トレンチ 堀 (SD06) と本丸南側石垣 (SL02) 全景 (南西から)

巻頭図版 2



3 トレンチ 堀 (SD06) 全景 (北西から)



1 3 トレンチ 堀 (SD06) 南岸と東壁断面 (西から)



2 3 トレンチ 堀 (SD06) 北岸と東壁断面 (西から)



5・6 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 全景 (南から)

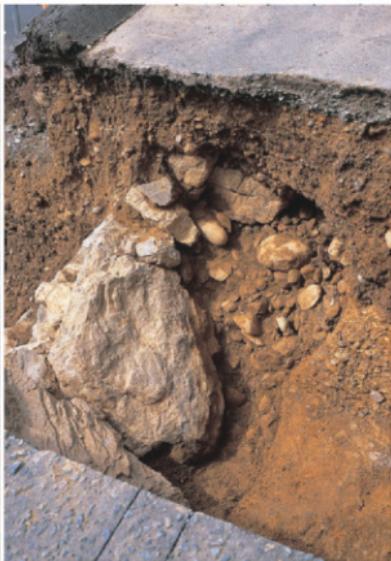


5 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 完掘状況 (南東から)

巻頭図版 6



1 5トレンチ 本丸南側石垣(南から)



2 5トレンチ SL02 残存最上段築石と栗石(東から)



3 6トレンチ 本丸南側石垣(SL02)(南から)



4 6トレンチ SL02 残存最上段築石と栗石(北西から)



1 7-1 トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) (南から)  
2 8-1 トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) (南西から)



3 7-1 トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) 根石と前面石列 (北西から)

卷頭図版 8



1 SD06出土 施釉陶器



2 SD06出土 土師器



3 SD05出土 かわらけ



4 瓦類

## 例　　言

- 1 本書は浜松城公園及び隣接地（静岡県浜松市中区元城町100-2ほか）における浜松城跡（12次調査）の発掘調査（確認調査）報告書である。なお、10次調査の成果についても、第1章で触れた。
- 2 発掘調査は、浜松城公園歴史ゾーン及び南エントランスゾーン整備事業に先立ち、埋蔵文化財の状況を確認するために実施した。発掘調査は、浜松市（都市整備部公園課）の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた国際文化財株式会社が担当した。調査にかかる費用は、国土交通省の社会資本整備総合交付金の補助を受けながら浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積	182m <sup>2</sup>
委託期間	平成26年（2014年）7月17日～平成27年（2015年）3月10日
	（うち現地調査期間　平成26年（2014年）9月1日～10月27日）
- 4 調査は、鈴木一有・鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、辻広志（国際文化財株式会社）が担当し、二川目直人（国際文化財株式会社）が補佐した。
- 5 本書の執筆は、第1章1～4を鈴木京太郎が、第2章1（8）・2（4）、第3章を鈴木一有が、その他を辻が行った。現地調査における写真撮影は主に辻が行い、一部を鈴木一有が行った。遺物の写真撮影は鈴木一有が行った。編集は辻が行ない、花井晶子（国際文化財株式会社）が補佐した。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 9 本書では参考文献等の表記において、以下のような略称を用いる。

教育委員会→教委	（財）浜松市文化振興財團→浜文振
----------	------------------
- 10 現地調査、整理作業及び本書の編集にあたり、以下の方々からご協力・ご指導を賜った。  
（敬称略、順不同）  
加藤理文、河合修、藤沢良祐、向坂鋼二

# 浜松城跡 10

## 目 次

### 卷頭図版

### 例 言

第1章 序論 .....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 浜松城をめぐる環境.....	2
3 浜松城跡の調査の履歴.....	5
4 10次調査の成果.....	7
5 調査の方法と経過.....	11
第2章 調査成果 .....	12
1 本丸南側石垣及び本丸南側の調査.....	12
2 天守曲輪南側石垣及び空堀跡の調査.....	28
第3章 総括 .....	38
1 清水曲輪南端部の成果.....	38
2 本丸南側の堀跡 (SD06) の評価.....	38
3 本丸南側石垣について.....	43
4 天守曲輪石垣と天守曲輪をめぐる堀跡.....	43

### 図 版

## 図版目次

### 卷頭図版

- 1 3・6トレンチ 堀 (SD06) と本丸南側石垣 (SL02) 全景
- 2 3トレンチ 堀 (SD06) 全景
- 3 1 3トレンチ 堀 (SD06) 南岸と東壁断面
- 2 3トレンチ 堀 (SD06) 北岸と東壁断面
- 4 5・6トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 全景
- 5 5トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 完掘状況
- 6 1 5トレンチ 本丸南側石垣
- 2 5トレンチ SL02残存最上段築石と栗石
- 3 6トレンチ 本丸南側石垣 (SL02)
- 4 6トレンチ SL02残存最上段築石と栗石
- 7 1 7-1トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01)
- 2 8-1トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01)
- 3 7-1トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) 根石と前面石列
- 8 1 SD06出土 施釉陶器
- 2 SD06出土 土師器
- 3 SD05出土 かわらけ
- 4 瓦類

### 図版

- 1 1 1・2トレンチ 完掘状況 (北から)
- 2 1トレンチ 東壁断面 (西から)
- 3 1トレンチ 東壁・南壁断面 (北西から)
- 4 2トレンチ 東壁断面 (西から)
- 5 2トレンチ 南壁断面 (北から)
- 2 1 3トレンチ 堀 (SD06) 北岸 (南西から)
- 2 3トレンチ 堀 (SD06) 北岸と大走り (西から)
- 3 3トレンチ 堀 (SD06) 南岸
- 4 3トレンチ 溝 (SD05) (西から)
- 5 3トレンチ 溝 (SD05) 出土かわらけ (北東から)
- 3 1 4トレンチ 完掘状況 (南西から)
- 2 4トレンチ 溝 (SD04) ・小穴 (SP01) (南から)
- 3 4トレンチ 溝 (SD04) ・小穴 (SP01) (西から)
- 4 4トレンチ 堀 (SD06) 北岸 (南西から)
- 5 4トレンチ 堀 (SD06) 南岸 (南西から)
- 4 1 5トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) (南東より)
- 2 6トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) (南西から)
- 3 7-1トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) (南から)

- 4 4 7-1トレンチ 天守曲輪南側石垣完掘状況（南西から）  
 5 7-1トレンチ 根石と前面石列（西から）  
 5 1 7-2トレンチ 完掘状況（西から）  
 2 7-2トレンチ 東側断面（北西より）  
 6 1 7-3N・Sトレンチ 堀（SD01・02）完掘状況（北東から）  
 2 7-3N・Sトレンチ 堀（SD01・02）と中土手（西から）  
 7 8-1トレンチ 天守曲輪南側石垣（SL01）（南西から）  
 8 1 8-1トレンチ 天守曲輪南側石垣（SL01）完掘状況（南から）  
 2 8-1トレンチ 天守曲輪南側石垣（SL01）根石と東壁断面（南西から）  
 9 1 8-2トレンチ 完掘状況（西から）  
 2 8-2トレンチ 完掘状況（東から）  
 10 1 8-3トレンチ 完掘状況（西から）  
 2 8-3トレンチ 堀（SD03）東壁断面（南西から）  
 11 1～3トレンチ 出土遺物（1トレンチ：1～5、2トレンチ：6～17、3トレンチ：18～29）  
 12 4～8トレンチ 出土遺物（4トレンチ：30～35、5トレンチ：36～39、7トレンチ：40～49、  
     8トレンチ：51～56）

## 挿 図 目 次

Fig. 1	浜松城跡の位置	1	Fig. 19	6 トレンチ実測図	22
Fig. 2	浜松城跡の周辺地形	2	Fig. 20	1 トレンチ出土遺物	24
Fig. 3	浜松城と城下町の構造	3	Fig. 21	2 トレンチ出土遺物	25
Fig. 4	浜松城跡復元図	4	Fig. 22	3 トレンチ出土遺物	26
Fig. 5	浜松城跡における調査・立会等箇所図	6	Fig. 23	4 トレンチ出土遺物	26
Fig. 6	10次調査区配置図	7	Fig. 24	5 トレンチ出土遺物	27
Fig. 7	10次調査実測図	8	Fig. 25	7-1トレンチ実測図	29
Fig. 8	10次調査C区実測図	9	Fig. 26	7-2・3N・3Sトレンチ実測図	30
Fig. 9	10次調査写真	10	Fig. 27	8-1トレンチ実測図	32
Fig. 10	5トレンチ石垣の発掘作業	11	Fig. 28	8-2・3トレンチ実測図	33
Fig. 11	現地説明会風景	11	Fig. 29	7 トレンチ出土遺物	35
Fig. 12	調査トレンチ配置図	13	Fig. 30	8 トレンチ出土遺物	36
Fig. 13	1・2トレンチ実測図	14	Fig. 31	発掘調査構造推定図	39
Fig. 14	3トレンチ実測図	16	Fig. 32	浜松城跡 徳川家康在城期間連の 遺構と遺物	41
Fig. 15	3トレンチSD05実測図	17			
Fig. 16	4トレンチ実測図	19	Fig. 33	出土品の年代	42
Fig. 17	4トレンチSD04・SP01実測図	20	Fig. 34	1985年に確認した本丸南側石垣	43
Fig. 18	5トレンチ実測図	21			

## 挿 表 目 次

Tab. 1	浜松城跡における調査等の履歴	5	Tab. 3	浜松城跡における大窯3段階の遺物を 出土した主要地点	40
Tab. 2	出土遺物観察表	37			

# 第1章 序論

## 1 調査に至る経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、市の中心部に位置し、天守曲輪を中心とする中枢部には一部の石垣が残存しており、浜松市指定史跡として保護されている。また、城跡の一部は浜松城公園として整備され、都市部の貴重な憩いの場として市民に親しまれている。

近年の浜松城公園は、利用者ニーズの多様化、各施設の老朽化などの課題が生じ、再整備の必要性が求められてきた。そこで、市中心部の都市機能を充実させるため、公園及びその周辺において、長期的な視野に立った整備が検討されることになり、2009年に浜松城公園歴史ゾーンの整備基本構想が策定され、2011年には基本計画が策定された。

そうした状況の中、浜松城公園歴史ゾーン整備基本設計に先立ち、浜松市（都市整備部公園課）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が協議を行なった。その結果、西端城曲輪、清水曲輪、本丸南側周辺における遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査を実施し、今後の整備に向けた検討材料とすることとなった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した国際文化財株式会社が実施した。現地調査は2014年9月1日から10月27日にかけて実施した。調査面積は182m<sup>2</sup>である。



Fig.1 浜松城跡の位置

## 2 浜松城をめぐる環境

**地理的環境** 浜松城跡は、三方原台地の東縁部に位置し、天竜川沖積平野に臨む河岸段丘を利用して築城されている。最大で東西600 m、南北700 mの城域を有する連郭式の平山城であり、最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって本丸、二の丸、三の丸と階段状に主要な曲輪が築かれている。また、城跡の北側や南側には入り組んだ谷地形や低湿地がみられ、それらを巧みに取り入れながら曲輪や堀が配置されている。



Fig. 2 浜松城跡の周辺地形

**歴史的環境** 【原始・古代】浜松城跡周辺において、原始～古代の集落遺跡の存在は確認されていない。一方で三方原台地東縁部は古墳の多い地域であり、浜松城域においても、当地域では数少ない横穴墳である作左山横穴の存在が知られている。また、浜松城域では過去の工事で須恵器が出土しており、他にも後期古墳の存在がうかがわれる。

【中世】浜松城の前身である引馬城は、現在の東照宮付近一帯の小規模な丘陵地に位置する。15世紀代に築城されたとみられ、15世紀末～16世紀代の遺物が出土している。また、引馬城の東側には中世東海道の宿場町として引馬宿が栄えていた。引馬城築城時の城主は不明であるが、16世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が城主を務めていた。元亀元（1570）年に徳川家康が岡崎城から引馬城に移ると、城域を西側の段丘へと拡張して浜松城と改称したとされる。家康在城期の浜松城の構造は不詳であるが、石垣や瓦葺建物のない中世的な城であったとみられる。天正18（1590）年、家康の間東移封に伴い豊臣秀吉配下の堀尾義晴が入城すると、浜松城は現在みられる野面積みの石垣が築かれ、天守をはじめとする瓦葺建物が建築されたと考えられている。

【近世】現在残る絵図等をみると、江戸時代前期には天守曲輪・本丸・二の丸等に加え、三の丸や城下町の整備までがほぼ完了していたとみられる。一方で天守はすでに失われていたとみられ、その姿は描かれていない。幕末に至るまで改修を重ねながらも基本的な繩張りは踏襲された。また、東海道は城域の南端である大手門の前でほぼ直角に折れ曲がって、直線的に馬込川へと延びるように整備され、沿道は宿場町として栄えた。浜松城の城主は、幕府の要職を務める譜代大名が短期間に務めるようになり、江戸時代を通じての城主は九家二十二代を数える。

【近現代】明治6（1873）年に廃城令が出されると、浜松城の建物は解体され、土地は払い下げられて、浜松城域の地形は大きく改変を受けた。昭和25（1950）年に動物園やプールなどを含む浜松公園が開設され、昭和33（1958）年には天守台の上にRC造の復興天守が建築された。その後、動物園、プール等は撤去され、広場や駐車場等に再整備されている。



Fig. 3 浜松城と城下町の構造

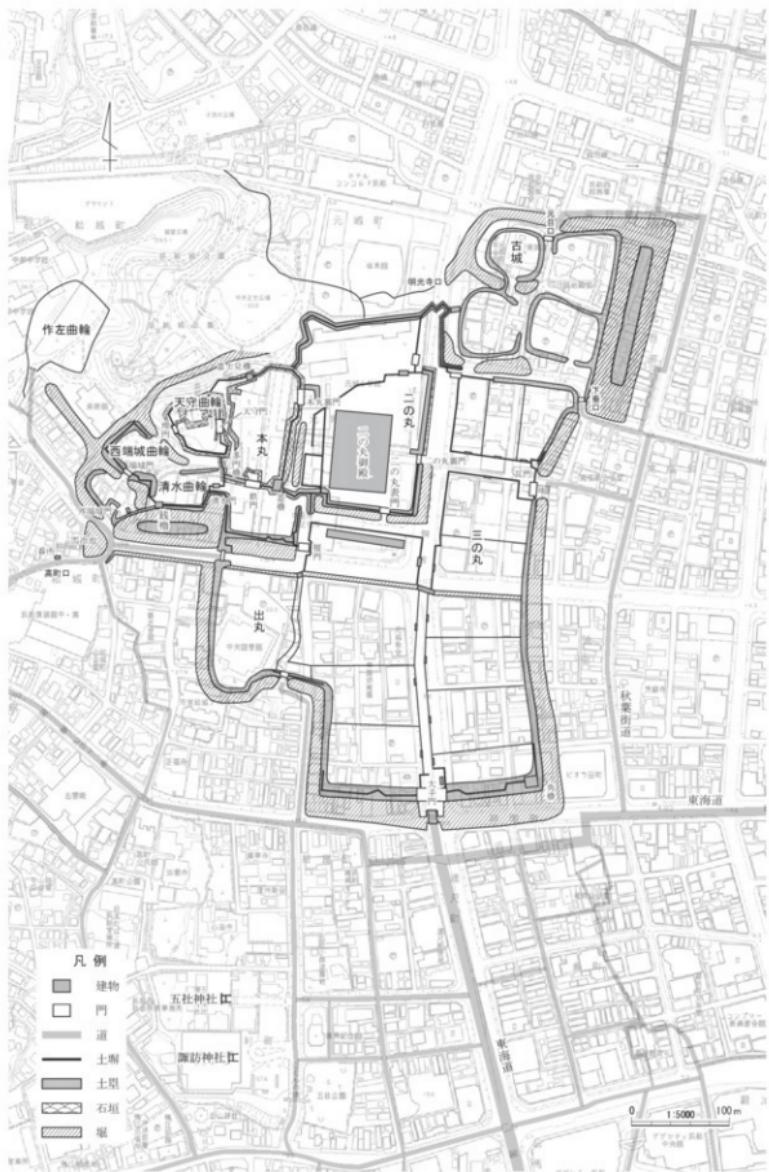


Fig. 4 浜松城跡復元図

### 3 浜松城跡の調査の履歴

**これまでの調査・工事立会等** 浜松城跡では、これまで13度にわたる発掘調査が行われている。いずれも小規模な本発掘調査かトレンチ掘削による試掘・確認調査であり、まとまった面積での本発掘調査は行われていない。また、その他にも工事立会、不時発見による現地踏査などが行われている。それらをTab. 1とFig. 5にまとめた。

Tab. 1 浜松城跡における調査等の履歴

#### 発掘調査

名称	年次	調査事由	成果等	文献
1次	1960年	浜松農工商による確認調査		
2次	1979年	市役所地下駐車場整備	工事時に石垣が発見され、測量等を実施	浜松市教委1996
3次	1984年	電線地中化工事	天守曲輪周辺の調査で、未知の石垣等を確認	浜松市教委1984 浜松市教委1996
4次	2009年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の礎石等を確認	浜文版2010
5次	2010年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡・富士見櫓の確認調査で、天守門櫓部の基礎構造と考えられる根石列等を確認	浜文版2011
6次	2011年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守跡の確認調査で、櫓台石垣の裏込石等を確認	浜文版2012a
7次	2011年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二の丸の確認調査で井戸跡を確認	浜文版2012b
8次	2012年	天守門復元工事	天守門に付随する瓦葺み排水設備の全体像を確認	浜松市教委2013a
9次	2012年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作左曲輪等の確認調査で、柱穴等を確認	浜松市教委2013b
10次	2014年	市役所駐車場整備	溝等を確認	本報告
11次	2014年	遺構現状把握のための確認調査	引馬城跡（古城）の確認調査で、土壘等を確認。かわらけが多数出土。	2016年報告予定
12次	2014年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側の石垣、天守曲輪南側の空堀、戰国期以前に遡る大型窓等を確認	本報告
13次	2015年	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12次調査で確認したものと同一の可能性がある大型溝を確認	2016年報告予定

#### 工事立会など（主なもの）

記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914年	中堀埋立工事	須恵器出土	静岡県1930
B	1957年	市役所庁舎建設	須恵器出土	浜松市教委1996
C	1958年	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委1996
D	1960年	東照宮社殿建設	境内より陶器が出土	浜松市教委1996
E	1964年	動物園内施設整備	作左山横穴を確認	向坂1976
F	1985年	駐車場擁壁工事	本丸南側石垣を確認	浜松市教委1996
G	1993年	天守曲輪石垣補修	天守台の盛土や裏込の状況等を確認	浜松市教委1996
H	2012年	天守曲輪ミカン改植	瓦が出土	浜松市教委2013c
I	2012年	水道工事	引馬城（古城）北側の堀を確認	浜松市教委2014
J	2013年	市役所南別館解体工事	出丸から三の丸にかけての堀を確認	浜松市教委2015
K	2014年	マンション建設	三の丸東側の堀を確認	2016年報告予定

#### 参考文献

- 静岡県 1930 『静岡県史』第1巻(旧版)
- 向坂鋼二 1976 『浜松市動物園内作左山横穴』『森町考古』10
- 浜松市教育委員会 1984 『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
- 浜松市教育委員会 1996 『浜松市指定文化財 浜松城跡 一考古学的調査の記録一』
- 財浜松市文化振興財团 2010 『浜松城跡4次』
- 財浜松市文化振興財团 2011 『浜松城跡5次』
- 財浜松市文化振興財团 2012a 『浜松城跡6次』
- 財浜松市文化振興財团 2012b 『浜松城跡7次』
- 浜松市教育委員会 2013a 『浜松城跡8次』
- 浜松市教育委員会 2013b 『浜松城跡9次』
- 浜松市教育委員会 2013c 『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2014 『平成24年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2015 『平成25年度 浜松市文化財調査報告』

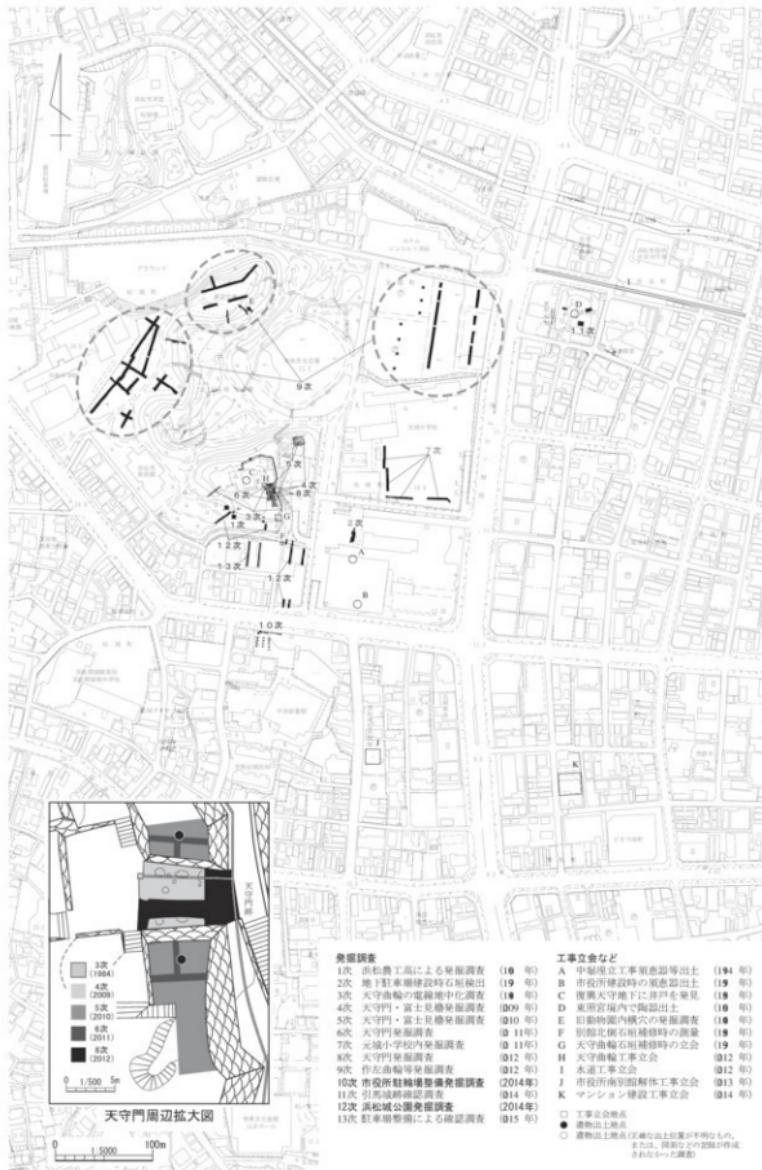


Fig. 5 浜松城跡における調査・立会等箇所図

## 4 10次調査の成果

**調査の概要と経緯** 浜松城跡10次調査は、浜松城公園南エントランスゾーン整備計画地内の駐輪場の移設に伴い、Fig. 6の浜松市中区松城町213-3、213-4で実施された本発掘調査である。調査面積が18箇所計19m<sup>2</sup>と小規模な発掘調査であり、今回報告する12次調査と同様に浜松城公園整備事業に関わる案件であるため、ここで調査成果を報告することとした。

発掘調査は浜松市（財務部資産經營課）の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。確認調査を平成26年5月13日に実施したところ、一部で遺構・遺物が確認されたため、平成26年6月3～4日の2日間で本発掘調査及び工事立会いを実施した。現地での調査及び立会いは鈴木一有・鈴木京太郎が担当し、武田裕美、小杉直孝、熊谷洋子が補佐した。発掘調査費用はすべて浜松市が負担した。

**確認調査** 2m×2mの調査坑を6箇所設定して調査を実施した。その結果、出土遺物は確認されなかつたものの、調査坑3で土坑を1基確認した。なお、調査区域の南側は表土直下で基盤層が確認され、すでに削平されていることが判明した。

**調査の方法** 調査対象は、駐輪場覆屋の基礎が設置される59箇所のうち18箇所である。残りの41箇所は、丘陵削平部や、小型の基礎等の理由で工事立会いとなった。各調査区は重機で表土を掘削し、人力で粗掘り・遺構精査・遺構掘削を行った後、測量・写真撮影を行った。

**調査の成果** 基本層位は、表土や近現代の埋土層の下にシルトまたは粘土層が堆積し、地形が低い部分ではその下に砂層がみられる。基盤層はしまりの強い黄褐色シルトまたは粘土層であり、グライ化により部分的に青灰色を呈する。全体の地形は南西から北東へと緩やかに下がっている。それぞれの調査区の状況はFig. 7・8に示した。遺構は、A6区、A9区、C1区において、南北方向に延

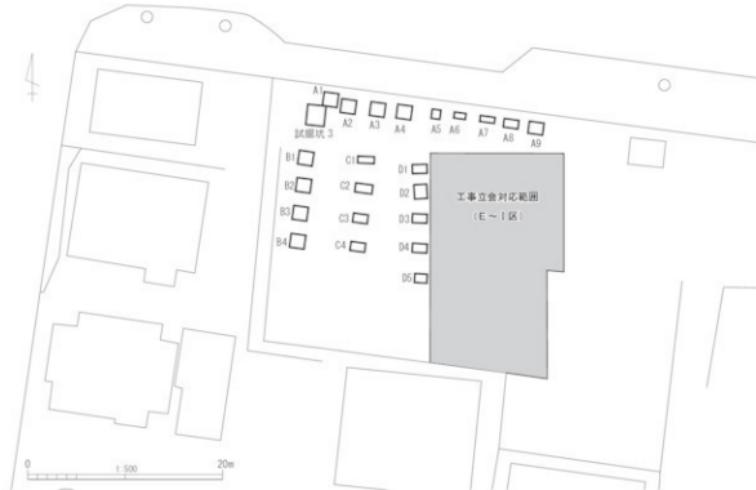


Fig. 6 10次調査区配置図

Fig. 7 10次調査実測図

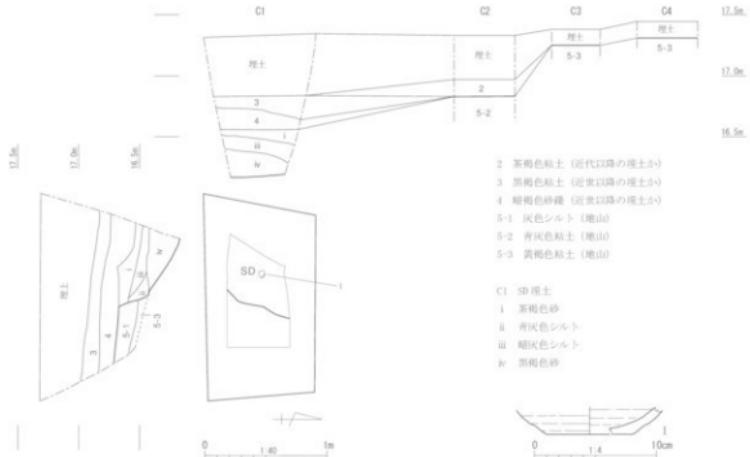


Fig. 8 10次調査C区実測図

びる溝 (SD) が各 1 条確認されている。いざれも調査区外に及んでいることから幅は確認できない。A6 区 SD は検出面からの深さ 35cm、調査区内での幅 25cm を測る。A9 区 SD は検出面からの深さ 25cm、調査区内での幅 46cm を測る。C1 区 SD は、検出面からの深さ 50cm、調査区内での幅 70cm を測り、かわらけが出土している。出土遺物は極めて少なく、図示できるのは C1 区 SD から出土した Fig. 8 かわらけ (1) のみである。

かわらけは  $1/4$  程度の破片で口縁部を欠く。ろくろ成形、底部は糸切未調整である。底径 7.0cm を測る。16世紀後半頃のものと考えられる。

**小 結** 調査区域の北へ北東部にかけては自然堆積が認められ、一部で遺構が確認された。一方で調査区域南部では基盤層が表土直下で確認されており、削平を受けていることが判明した。また、工事立会いの対象である E ~ I 区においては、大半が工事掘削深度以上の擾乱を受けており、自然堆積層や基盤層を確認することはできなかった。特に東寄りの H・I 工区については、現地表下 2 m 近くまで掘削しても基盤層が確認できず、著しい湧水がみられた。

近世の絵図を見ると、調査対象地の南側丘陵上には出丸が存在し、北側には西から城内へと至る道が東西に延びている。出土遺物は、C1 区の SD から出土したかわらけの 1 点のみであるが、絵図の存在しない 16 世紀後半頃には、すでに調査区域が城域に含まれていた可能性を示すものとして注目される。また、工事立会区域の東寄りで擾乱土が厚く湧水の著しかった H・I 工区については、一部の絵図に描かれている出丸を取り囲う堀の箇所付近に位置していることは留意すべきである。今後の周辺における調査の進展に期待したい。



調査区域全景（南西より）



試掘坑3 SD検出状況



A6調査区 SD検出状況



A9調査区 SD検出状況



B3調査区 完掘状況



C1調査区 SD検出状況



D1調査区 完掘状況



出土遺物

Fig. 9 10次調査写真

## 5 調査の方法と経過

**調査区設定** 今回の調査では、浜松城公園の整備に先立ち遺構の残存状況を把握するため、本丸南側にある市役所西別館跡地及び駐輪場跡地と、天守曲輪南側の石垣、空堀及び西端城曲輪にあたる元城児童公園周辺の2箇所に調査区を設定した。トレンチは基本的に幅が1.5 mで、前者では6本(1～6T)のトレンチを、後者では2本(7T-1～3, 8T-1～3)のトレンチを設けた。なお、測量は両調査区共に、浜松城公園内の基準点を用い世界測地系にて行った。

**調査方法と経過** 調査の方法は、平坦面では表土や搅乱土の掘削を重機で行った後に、人力で基盤層まで遺構検出と掘削を行った。その際、樹木や構造物等は、調査に安全な範囲で現状のまま残した。土層図作成は、南北方向に主軸をもつトレンチが主であったため、東側長軸と北側又は南側短軸にて実施した。平面図作成はデジタル平板で行い、主要な遺構については詳細図を作成した。遺物については、包含層では層位ごとに、遺構では個体ごとに取り上げを行った。写真撮影は、トレンチ又は遺構ごとに、6×7判と35mm判の白黒ネガとカラーリバーサルのフィルムとデジタルカメラによる写真撮影を、主要な遺構については4×5判の写真撮影も実施し記録した。

トレンチ調査の進行順序は、本丸南側の駐輪場撤去工事等の関係から、天守曲輪南側石垣から西端城曲輪に想定される平坦面に設けた8トレンチ→7トレンチの順に行い、次いで本丸南側石垣に設けた5トレンチ→6トレンチ、本丸南側の市道中央住吉線の歩道沿いの1トレンチ→2トレンチ、本丸南側の駐輪場跡地の3トレンチ→4トレンチの順に行った。

1・2トレンチでは、近現代の搅乱層下に近代と思われる耕作土層を確認した。4トレンチでは、近現代の激しい搅乱層下のトレンチ南端で、地山層を掘り込む小さな溝跡(SD04)や小穴(SP01)等を確認した。このため、トレンチ北側の地山を使った盛土層を掘り込んで、断ち割り調査を行った。この結果、3・4トレンチ共に、東西方向の大きな堀跡(SD06)を検出し、その一部を掘削した。5・6トレンチでは、現代の擁壁の裏に封じ込められた本丸南側(多聞櫓)石垣(SL02)を検出した。石垣の根石が現状の地面より高い位置に露出しており、当時の遺構面は削平されていることが明らかとなった。7・8トレンチでは、両トレンチで天守曲輪南側石垣(SL01)の根石を検出したが、斜面の基部や空堀の斜面に石垣は検出されなかった。また、7トレンチでは北側堀跡(SD01)と南側堀跡(SD02)の中央に中土手とみられる高まりを検出した。

なお、調査期間中の10月16日(木)には、浜松城公園歴史ゾーン整備専門委員会による現地指導があり、調査成果に対する助言が寄せられた。

**現地説明会** 現地説明会は4回開催された。9月27日(土)には本丸南側石垣と天守曲輪南側の石垣と空堀の説明会を行い約70名が、10月5日(日)には台風18号が浜松に上陸した前日の悪天候であったが東京など遠方から約60名が、10月19日(日)には晴天に恵まれ本丸南側の堀跡SD06の説明会に630名以上が、10月26日(日)には「出世の街浜松 家康公祭り」と同時開催し、50名以上の見学者を迎えることができ、いずれも市民の関心の高さがうかがえた。



Fig. 10 5トレンチ石垣の発掘作業



Fig. 11 現地説明会風景

## 第2章 調査成果

### 1 本丸南側石垣及び本丸南側の調査

#### (1) 概要

**位置** 本丸南側では、Fig. 12の清水曲輪南端の1・2トレンチ、清水曲輪北側の3・4トレンチ、本丸南側斜面の5・6トレンチの、合計6箇所の調査溝を設定した。1・2トレンチでは、攪乱層しか確認できなかつたが、3・4トレンチでは戦国時代の堀(SD06)が残存していることを明確にし、5・6トレンチでは堀尾吉晴在城期の石垣(SL02)が擁壁の内側に残存していることを明らかにした。

**層位** 本丸南側で確認できる基本土層は、上層より1層(現代の堆積・整地層である表土層とアスファルト・碎石舗装層)、2層(近現代の掘削・埋土層である攪乱層)、3層(戦国期・近世～近現代の堆積・整地層)、4層(戦国期の堆積層や埋立て層)、5層(新生代第四期更新世の地山層)に大きく区分することができる。特に5層は、本丸側ではシルト質細砂から粘土まで、細分すると11層もの堆積層がみられた。これらは東鴨江累層に相当すると考えられる。これに対し本丸南端の1・2トレンチや西端城曲輪の7トレンチでは、多量の円礫を混じえるシルト質細砂となり下層ではさらに粗い疊層となっていることから、これらは東鴨江累層上位の三方原疊層と考えられる。

#### (2) 1トレンチ検出遺構

**層位と遺構** (Fig. 13) 1トレンチは、市道中央住吉線の歩道沿いから北側の市役所西別館跡地にかけて南北に設けた調査溝で、周辺の地形は2度余りの東下がりの傾斜地である。また、6m余り西には、かつて空堀の傍にあったと伝えられる3代目の「家康公鑑掛松」がある。調査前に検出が想定された遺構には、清水曲輪南側の空堀跡(字「実堀」)や、榎門西側延長上の土壠跡又は水堀跡(字「包丁堀」)などがあげられる。

調査の結果、トレンチの北側半分以上が現代の建物基礎等で搅乱されていることが判明した。南側の地山層上面も標高17.43～17.58mの比較的平らな東側傾斜がみられたものの、顕著な遺構は検出できなかつた。土層図の各層と遺構面の検討においても、古い時期の堆積物は確認できなかつた。以下に各層の概要を記す。

調査区の北側にみられる2-1～2-7層は、市役所西別館の解体・撤去に伴う埋土層である。また、調査区南側については、3-7層以下を掘り込む土坑状の搅乱、3-8層以下を掘り3-7層の焼土や炭で埋まる建物遺構、3-9～11層以下を掘るコンクリート製建物基礎、3-12・13層の比較的安定した堆積層などの遺構や層位が認められる。このうち、3-7-1層の焼土層と3-7-2・3層の炭を多量に含む層は、第二次世界大戦に伴う戦災によって形成された可能性が高い層である。さらに下層の3-9層も焼土塊と炭を微量含み、3-11層も多量の炭を含むが、いずれも時期は特定できなかつた。3-9～11層は礫を多く含み、コンクリート製建物基礎がこの層から掘り込まれていることから、盛土・整地層と考えられる。この建物基礎を覆う3-8層も、戦災時の建物建設にあたっての盛土・整地層とみられる。地山層直上の3-13層は、縹りが弱く唯一土壤化が見られた層で、多くの瓦や19世紀後半の磁器染付皿等を含んでいることから、近世の堆積層を近代に入つて耕作化した耕土層と推測される。

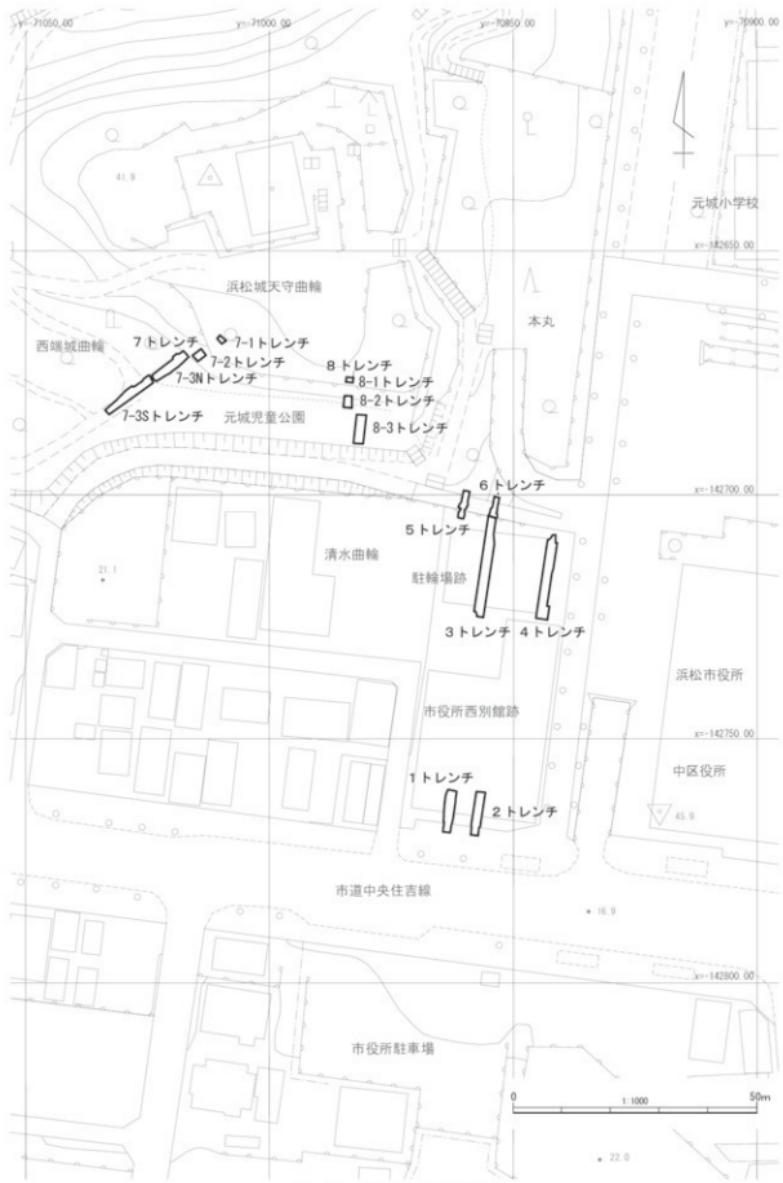
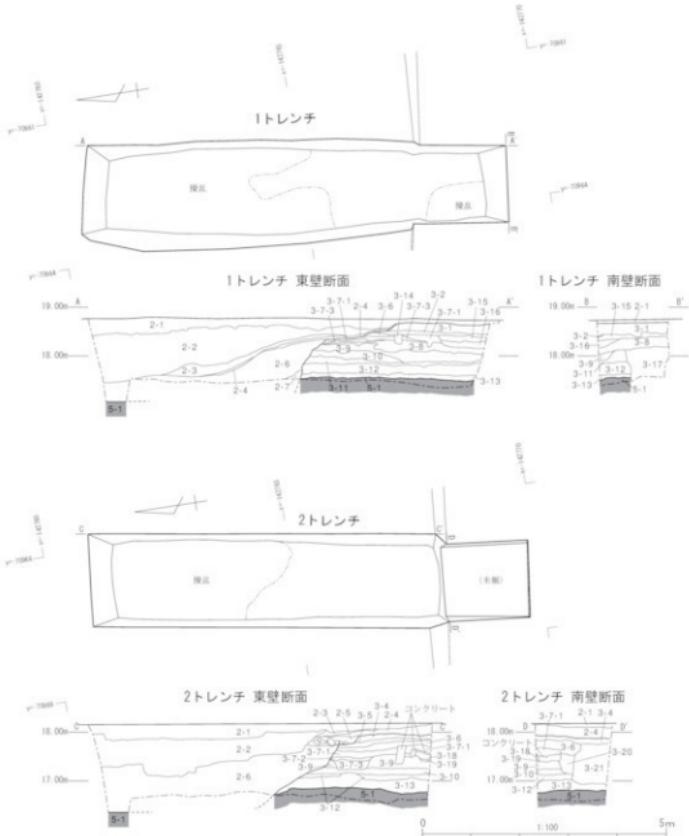


Fig. 12 調査トレンチ配置図



(赤役所西別指解体・撤去時採土)

- 2-1 灰白色 φ～50mmの砂利を含む。  
 2-2 にぶい褐色 シルト質細砂～粗砂。φ～20mmの円錐を微量に含む。  
 2-3 褐灰褐色 シルト質細砂～粗砂。  
 2-4 オリーブ灰色 シルト質粗砂。セルダル岩と砂岩を多量に含む。  
 2-5 褐灰灰色 φ～20mmの円錐を多量に含む。建物の基礎。  
 2-6 灰褐黄色 シルト質細砂～中砂。φ～20mmの円錐と瓦片を多量に含む。  
 2-7 にぶい黄色 シルト質細砂～粗砂。φ～20mmの円錐と5-1層のブロックを含む。  
 (近・現代屢疊)  
 3-1 明オリーブ灰色 φ～50mmの砂石。  
 3-2 灰白色 シルト質細砂～中砂。  
 3-3 褐灰黄色 シルト質細砂。  
 3-4 にぶい褐色 細砂質シルト。φ～20mmの円錐を多量に含む。  
 3-5 褐灰色 細砂質シルト。φ～10mmの円錐を微量に含む。  
 3-6 浅黄色 細砂質シルト。φ～10mmの円錐を微量に含む。  
 3-7-1 棕色 シルト質細砂。堆土を多量に含む。  
 3-7-2 棕色 シルト質細砂。堆土を多量に含む。SII。
 3-7-3 緑黒色 岩を多量に含む。  
 3-8 明黄褐色 シルト質細砂～粗砂。5-1層のブロックを含む。  
 3-9 褐灰黄色 シルト質細砂。堆土と岩を微量に含む。  
 3-10 にぶい黄色 細砂質シルト。  
 5-1 にぶい黄色 シルト質細砂。φ～50mmの円錐を多量に含む。  
 地山層。

Fig.13 1・2 Trench実測図

**遺物出土状況** 1トレンチからの出土遺物には、3層から出土した近世～近現代の陶磁器をはじめ、唐草紋軒平瓦(1)、ヘラ書き平瓦(2)、丸瓦(3～5)等の多量の瓦があげられる。

### (3) 2トレンチ検出遺構

**層位と遺構** (Fig. 13) 2トレンチは、1トレンチの4m余り東において南北に設けた調査溝である。調査の結果、1トレンチ同様に北側半分以上を現代の建物基礎等で擾乱されていること、南側も近現代の層位で満たされていることが判明した。残存する南側の地山層上面は、やや乱れはあるが、標高16.72～16.87mの比較的平らな東側傾斜が認められた。ただし、地山層上面において、顕著な遺構は検出できなかった。

壁面図の各層と遺構面の検討においても、1トレンチと同様に、戦国時代や江戸時代に遡りうる時期の堆積物は確認できなかった。この内、比較的安定した堆積とみられる地山層直上の3-12・13層の層厚については、1トレンチと2トレンチの間で、3-12層が0.2m余りから0.1m余りに減じているのに対し、逆に3-13層は0.1m余りから0.25m余りに増加しており、層厚に変化がみられることが明らかとなった。3-13層の層厚に変化があること、またこの地層が耕土とみられるところから、調査地は空堀内である可能性が考えられる。

**遺物出土状況** 2トレンチからの出土遺物には3層から出土した瀬戸美濃産灰釉丸皿(6)、白磁皿(7)があげられる。また、同じく3層からは、近世～近現代の陶磁器のほか、唐草紋軒平瓦(8・9)、桔梗紋軒丸瓦(10)、三ツ巴紋軒丸瓦(11)、刻印平瓦(12)、丸瓦(13～15)、輪違い瓦(16)、鬼瓦とみられる瓦(17)等の多量の瓦が出土した。

### (4) 3トレンチ検出遺構

**層位と遺構** (Fig. 14・15) 3トレンチは駐輪場跡地西側において南北方向に設けた調査溝である。調査途上で北側に拡張して6トレンチ下部と接合し、今回最長の21.5mを越えるトレンチとなつた。調査前に検出が想定された遺構は、清水曲輪の東縁に所在し南面する清水門跡や、清水門から本丸南側石垣(SL02)と清水曲輪南側の空堀跡(字「実堀」)に取り付く鉤状の土壙跡であった。調査の結果、上層では現代の建物基礎等の擾乱が大きく、擾乱層(2層)を除去した段階では当初想定していた遺構は確認できなかった。このため、南側を中心に一部北側にも残る地山を用いた盛土層(3層)を除去したところ、トレンチ中央の現代井戸跡とコンクリート製建物基礎の北側において、トレンチの西側から南東側に弧状に窪む溝跡(SD05)を検出した。さらに、トレンチ南側の盛土層(3層)を除去し全体を精査したところ、東西方向に有機物を多量に含む4層の存在が明らかとなった。後述するように、4トレンチでも同様な堆積層が検出されたことから、4層を埋土にもつ遺構を堀跡と捉え、SD06とした。

**溝跡(SD05)** 4層上面で検出されたSD05は、断面が丸皿状を呈し、トレンチを横断する延長が1.5m以上の遺構である。上端での幅は0.72～1.12m、深さは0.13～0.21mである。3-9層(極細砂質粘土層)の単層で埋まる。水の流れがあった様子は見られず、土質から考えて灌水していたものと思われる。

**SD05遺物出土状況** 弧状の溝跡南側より水平な状態で、かわらけ5点(18～22)が集中して出土した。これらの遺物は、後述する堀跡(SD06)の4層による埋め戻し完了後で、溝状の崖地に廃棄されたものと推測される。その後、地山層を用いた3層の盛り土が、4層の埋め戻しとそれほど時間差なく施工されたと仮定すると、SD06の埋め戻し時期と、本丸南側の整備時期が決められる良

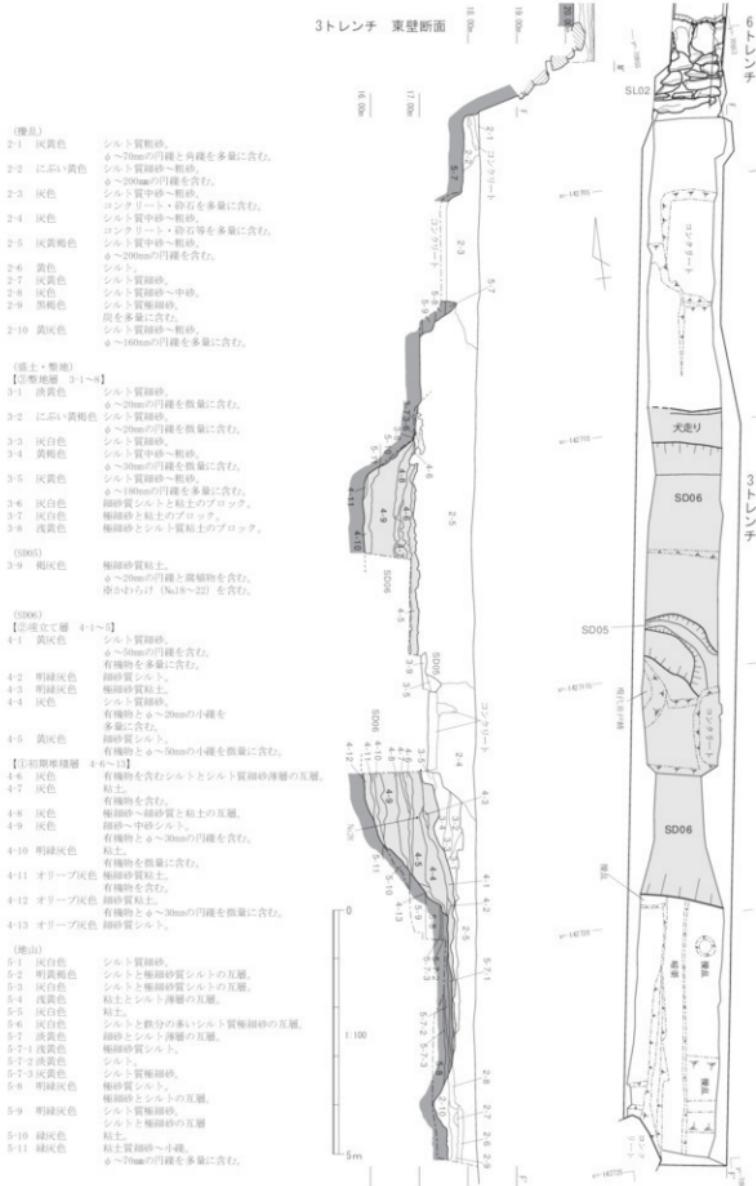


Fig. 14 3 ドレンチ実測図

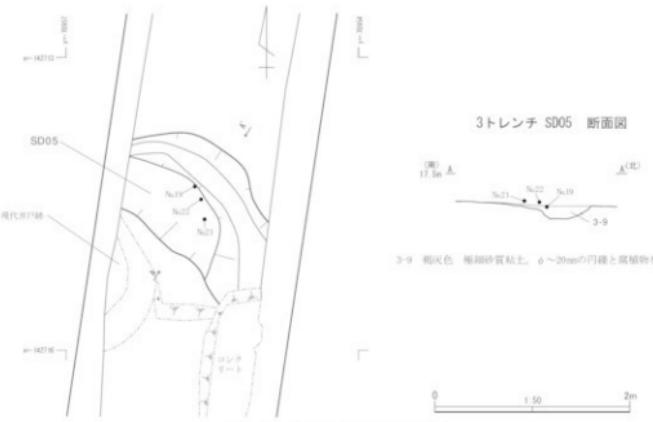


Fig. 15 3 トレンチSD05実測図

好な資料と考えられる。

**堀跡 (SD06)** SD06は3トレンチの中央で確認した大型遺構である。遺構の規模や形状、位置関係、出土遺物などから、戦国時代の堀跡と捉えられる。SD06は、上面において現代の擾乱が激しく上層の堆積状況の把握が困難なこと、北岸肩部から北側にあった土塁が大きく削平を受けているため上位の明確な構造や規模が不明であること、未調査部分が残るなど、不明な点が多く残る。SD06の断面形状は、現状では底の平らな逆台形の「箱堀」状を呈すると考えているが、堀中央部を掘り下げていないため確定的ではない。また、北岸肩部には幅0.6～0.8m余りにわたり盛土層(3層)が直接被ることから、犬走り状の平場が設けられていた可能性が高い。

残存するSD06の規模は、比較的良好く残る南岸肩部(標高17.58m)と、消失した土塁下の犬走りの肩部と思われる北岸肩部(標高17.07m)との上面幅が約9.72m、深さは南岸肩部から調査時最深部(標高15.84m)までが1.74mで、北岸肩部では1.23m、底幅は約6.56mである。北岸斜面の勾配は約52度、南岸斜面の勾配は約41度で、北岸斜面の方が急勾配で、この勾配は6トレンチの本丸南側石垣(SL02)の53度とほぼ同じである。削平された本丸南側の土塁の高さは、推測するしかない。本丸南側石垣(SL02)の根石が埋る地山層の標高が19.0m余りで、これ以上の高さの土塁であったことは明らかである。現在残る本丸平場の標高25.0mは超えないと思われるが、その間の高さとなろう。因みにSD06南岸肩部と現況の本丸平場との比高は、およそ7.4m余りとなる。

SD06の埋土は、①初期堆積層、②埋立て層、③整地層の大きく3つの層位に分けられる。①初期堆積層は、4-6～12層が相当する。これらの層位は、地山(5層)を掘り込んだ中に堆積しており、主に有機物を含む粘土～シルト質細砂からなる。初期堆積層には薄い粘土の堆積がみられ、水が溜まる環境にあったことがうかがえる。初期堆積層から遺物は全く出土していない。

②埋立て層は4-1～5層が相当する。4層下層の4-6～12層がシルトと極細砂の薄層互層を含む自然堆積層であるのに対し、4層上層の4-1～5層は上面が平らで踏み荒らされた様な痕跡をもつ4-6層上面に置かれた円錐を含む層である。このことから、4-1～5層は人為的な埋立てによつて形成されたものと考えられる。この埋立て層が何処から運ばれたものかは明らかではないが、南

岸平坦部上にまで薄く4~1層が存在すること、南岸側の層厚が厚く層理が北側傾斜であることから、SD06南側の谷状地の有機物を多く含む自然堆積層を埋土に用いたものである可能性が考えられる。埋立て層からは、比較的多くの遺物が出土している。

③整地層は3~1~8層が相当する。上面が凸凹に荒れた4層上に、地山と同質の土を用い整地したものと考えられる。整地層は最も厚い部分で0.88 mほどが確認できる。整地層についてもその出土元は明らかではないが、層理が南側傾斜であることから、本丸側の土塁である地山を切り崩した際の掘削土を、整地に用いたものと推測される。整地層中の遺物は極めて少ない。

**SD06遺物出土状況** SD06の上位層である2層から刻印引掛桟瓦(29)や多数の瓦と近現代の陶磁器が出土した。このほか、②埋立て層(4~1~5層)からは、比較的多くの遺物が出土した。4~1層からは土師器羽釜(26)、と瀬戸美濃産鉄釉丸皿、4~4層からはかわらけ(23・24)、4~5層からは瀬戸美濃産灰釉腰折皿(25)、土師器内耳錐(27・28)が出土した。また、北岸側の4~5層からは、本丸南側石垣(SL02)に用いられている珪岩(チャート)の3~6 cm大の割石片が3個出土している。

#### (5) 4トレンチ検出遺構

**層位と遺構(Fig. 16・17)** 4トレンチは駐輪場跡地東側の鉄門跡寄りに設けた調査溝で、当初は15.5 mであったがSD06の北岸を検出するため17.35 mまで北側に延長した。遺構残存状況は3トレンチと同様で、極めて擾乱が激しく、擾乱層(2層)を除去した段階では当初想定していた遺構は確認できなかった。この時点において、南岸平場の一部に南北方向の溝跡(SD04)と小柱穴(SP01)を、地山層(5層: 標高約17.4 m)の上面で検出した。さらに、トレンチ南側の盛土層(3層)を除去したところ、3トレンチ同様に有機物を多量に含む東西方向の堀跡(SD06)を検出した。

**溝跡(SD04)** SD04はSD06の南岸平場において検出した溝跡である。断面形はやや東に深い半円形を呈し、主軸は東に約11度傾く。延長0.4 m以上、上端での幅0.15~1.18 m、深さ約0.08 mで、僅かに底部が残存したものと考えられる。溝の内部は細砂質シルト層の单層で埋まる。SD04からは瀬戸美濃産鉄釉天目茶碗(30)、美濃産灰釉徳利(31)等が出土した。遺物の時期と遺構の残存状況から、盛土層(3層)を掘り込む比較的新しい遺構と思われる。

**小穴(SP01)** SP01はSD06の南岸平場において検出した小穴である。SP01は平面円形を呈し、直径が約0.26~0.32 m、深さ約0.43 mである。底部には直径0.12 mの柱痕と思われる痕跡を残すことから、掘立柱建物等の柱穴と考えられる。埋土はシルト質細砂~粗砂層である。小穴からの出土遺物は無い。遺構の残存状況から、地山層(5層)を掘り込む柱穴と思われるが、どのような構造物を構成するかは不明である。

**堀跡(SD06)** 4トレンチにおいても、東西方向にのびる戦国時代の大規模な堀跡(SD06)を確認した。3トレンチと同様に、現代における擾乱が激しいこと、南岸肩部は中段平場まで掘り下げたのみであること、北岸については存在を確認したに留めたことなど、不明な点を多く残す。残存するSD06の上端幅は、明らかとなった南岸肩部(標高17.54 m)と、壊された土塁の最も高い箇所(標高16.95 m)で計測して、13.2 mである。深さや底部の幅については深部まで調査を行っていないため不明である。SD06の上端の幅は3トレンチよりも広い。このことについては、SD06が自然の谷状地を利用したことによるのか、擾乱による結果なのか、さらに別の理由があるのかは、今後の調査による確認が必要である。南岸斜面の勾配は約41度で、3トレンチで検出した状況と同様である。

4~1~8層は、地山層(5層)を掘り込むSD06内の堆積層で、有機物を僅かに含むシルト~細砂か

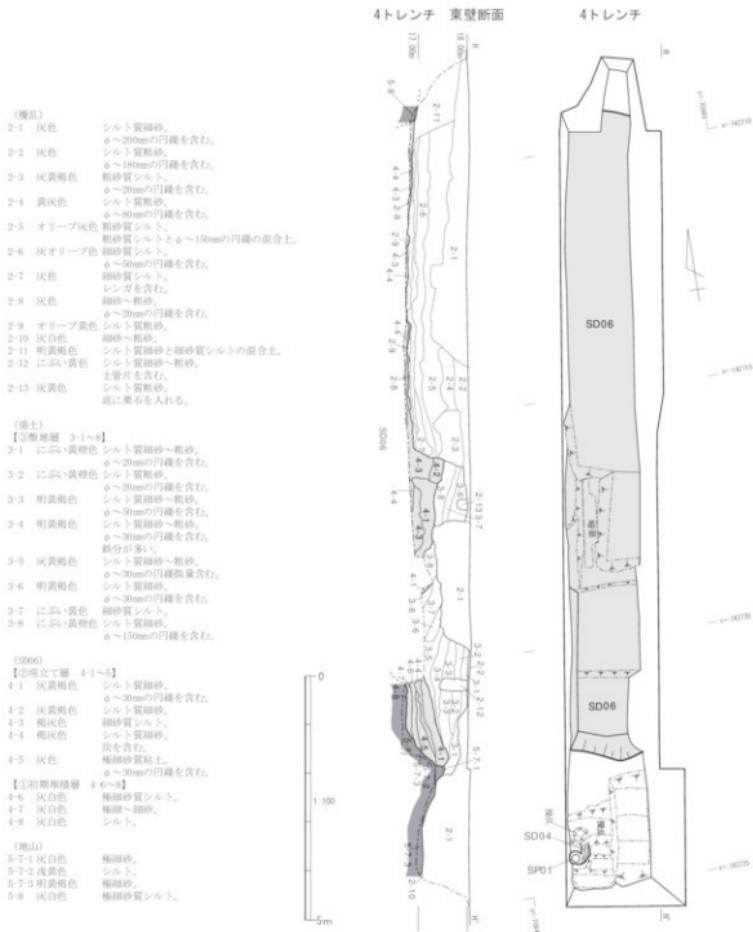


Fig. 16 4 トレンチ実測図

らなる。大きく波打つ4層上には、地山土を用いた整地層(3-1～8層)を、厚く被せていたとみられる。整地層の厚さは不明であるが、最も高い所で標高18.06 mに至り、0.98 m以上であったことが分かる。この整地層(3層)の層理は、3トレンチ同様に南側傾斜である。

**SD06遺物出土状況** SD06の上層にあたる2層からは、三ツ巴紋軒桟瓦(34)と鬼瓦(35)や多数の瓦、近現代の陶磁器が出土した。SD06の埋土にあたる3-4層下部からは、瀬戸美濃産の黄天目茶碗(32)が、4-3層からは須恵器壺(33)等が出土している。また、南岸の3-4層からは、本丸南側石垣(SL02)に用いられている珪岩の長さ30cm大の割石片1個が出土している。

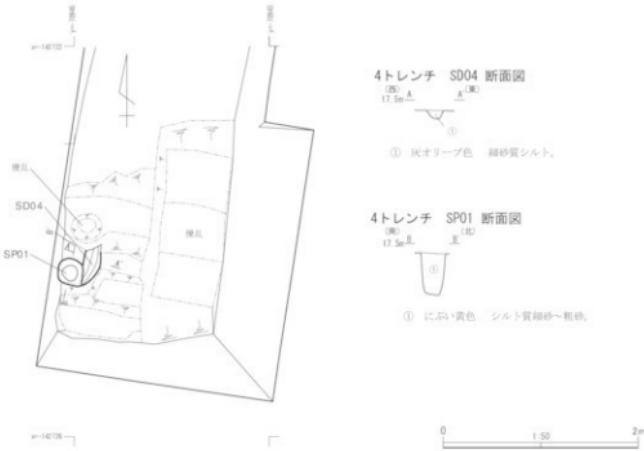


Fig. 17 4 トレンチSD04・SP01実測図

### (6) 5 トレンチ検出遺構

**層位と遺構 (Fig. 18)** 5 トレンチは、駐輪場跡地北側の斜面から斜面上の歩道にかけて設けた調査溝で、本丸南側に設けられた石垣 (SL02) を検出した。発見された石垣前面の斜面には、崩落土 (2~5層)、裏込めの碎石、そして検地石の擁壁があり、石垣上部は歩道の東傾斜に合わせて削られている。その上部には盛土層 (2~1~4層)、碎石整地層、アスファルト舗装が重なっている。本丸南側石垣 (SL02) の上には、多聞櫓 (桁行22間×梁行3間) があり、土塀を挟んで東側の鉄門に繋がっていた。

**本丸南側石垣 (SL02)** 5 トレンチにおいて検出した石垣の幅は1.1~1.5 m、高さは2.46 m、石積みは8段分が確認できた。石垣は地山層 (5層、標高19.14 m) の上に構築されている。地山層は、現状の地表面との高低差で0.6 mほどがむき出しになっているが、この部分は本来の地盤が削り取られたものと考えられる。

石積みは自然石の小口面か長側面を石面とした野面積である。築石の最大のものは、4段目の石材で、石面幅1.07 m×石面高0.39 mである。最上段の築石2石の大きさは、石面幅0.59 m×石面高0.28 m×奥行き (控) 0.74 mと、石面幅0.37 m×石面高0.14 m×奥行き (控) 0.81 mである。使用石材は、全て珪岩である。石面の勾配 (矩) は、現状では根石から4段目までが約67度、これより上が約45度となっている。途中で勾配が変わるのは、浜松城跡の天守曲輪石垣の多くが直線的な勾配 (矩) で反りを持たないことを考えると、石積としては違和感がある。孕みが生じているのではないかと思われる。築石の間には、間詰石が多数みられる。石積の石戸 (艤) には、裏込 (4~7層) に栗石として直径3~14cmの円錐が多数使われている。地山層 (5~1層) は標高20.64~21.38 mの裏込背後に見られ、その上部ではシルト質細砂~粗砂の4~1~6層が盛土されている。

**遺物出土状況** 築石の隙間から、三ツ巴紋軒丸瓦 (38) と繋ぎ九つ目結い紋軒丸瓦 (39) が、上層の2層から斜格子紋軒平瓦 (36・37) や多数の瓦が出土した。

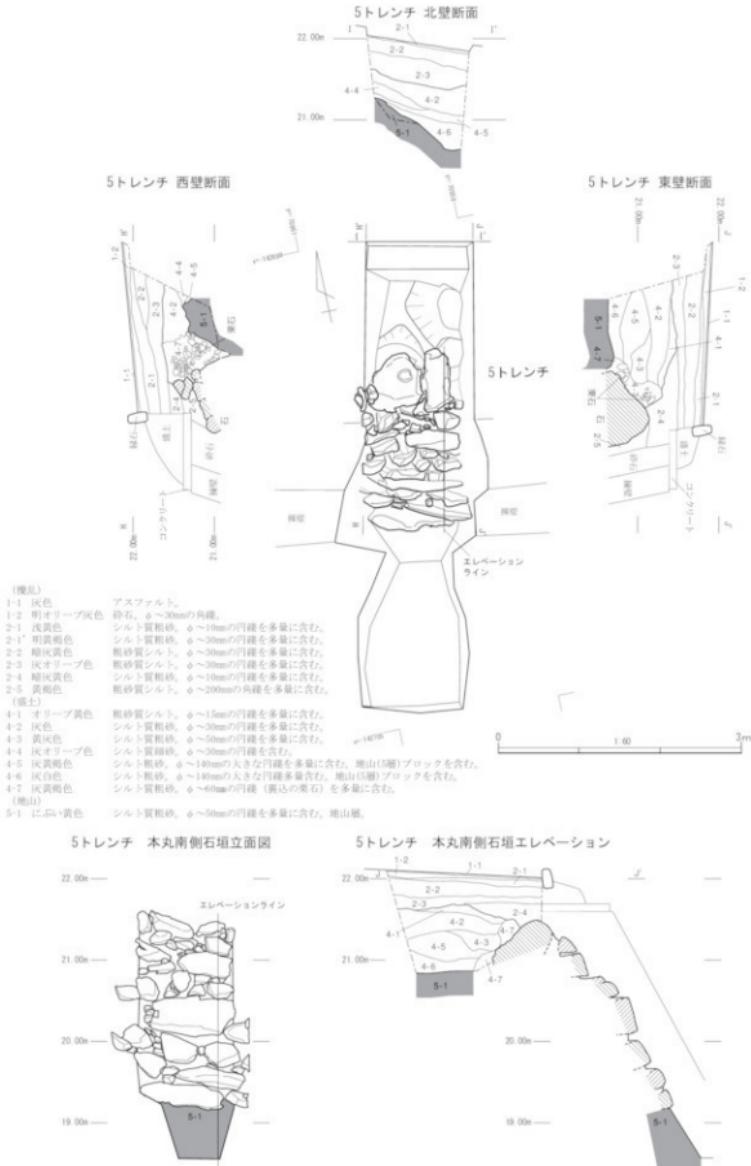


Fig. 18 5トレンチ実測図

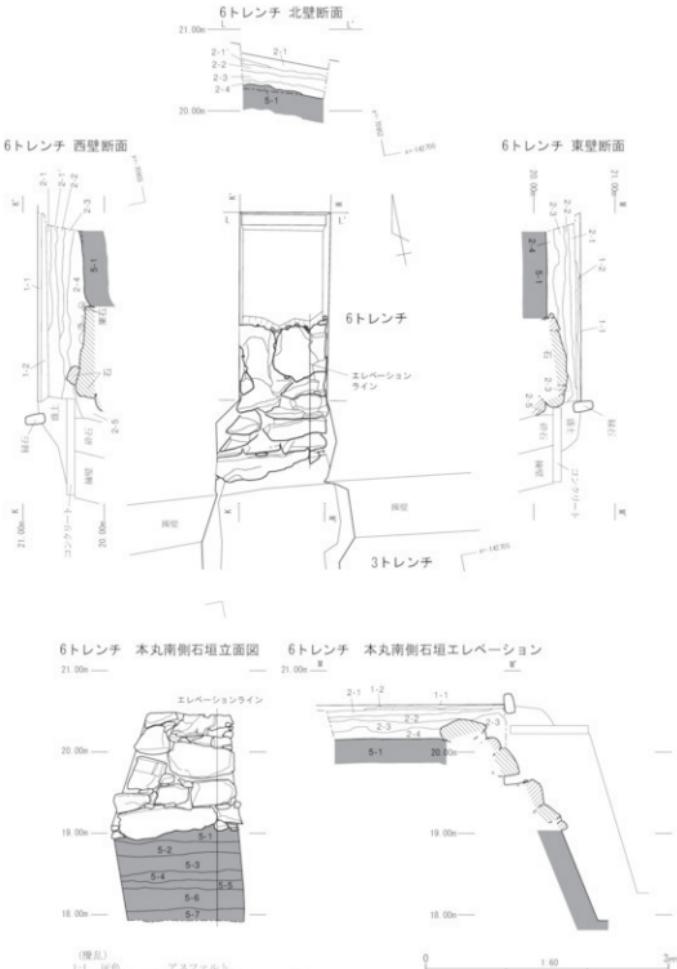


Fig. 19 6 トレンチ実測図

## (7) 6トレンチ検出遺構

層位と遺構 (Fig. 19) 6トレンチは、現況の本丸南側土塁擁壁中に設定した調査溝で、5トレンチの東方5m余りに位置する。南側延長部には3トレンチが接続する。5トレンチと同様に本丸南側に設けられた石垣 (SL02) を検出した。石垣を覆う層位は5トレンチと同様である。

**本丸南側石垣 (SL02)** 6トレンチで検出した石垣は、幅が1.1～1.6m、高さ1.54mであり、4～5段分を確認した。石垣は地山層（5層、標高18.94m）の上に構築されている。地山層は、現状の地表面との高低差で1.1mほどがむき出しになっている。5トレンチと同様、この部分は本来の地盤が削り取られたものと考えられる。

石積は自然石の野面積である。築石の最大のものは、1段目の石材で、石面幅1.22m×石面高0.33mである。最上段の築石2石の大きさは、石面幅0.43m×石面高0.18m×奥行き（控）1.05mと、石面幅0.83m以上×石面高0.43m×奥行き（控）0.86mである。使用石材は全て珪岩である。石面の勾配（矩）は、根石から約43度である。根石高は0.2m余り5トレンチよりも東側の6トレンチが高く、両トレンチを結ぶ根石の方角はN-97度-Eである。築石の間には、多数の間詰石がみられる。6トレンチでは遺存状態が良くないが、石積の裏込めに栗石として直径3～7cmの円礫が使われている。地山層（5-1層）は標高20.17～20.31mの裏込背後に見られるが、平らな上部に4層が残存しておらず、盛土層（2層）が直接のる。出土遺物には瓦があるが、図示しうるものはない。

## (8) 出土遺物

**1トレンチ出土遺物 (Fig. 20)** 1は、3層から出土した軒平瓦である。中心飾りから2単位の均整唐草紋が表現されている。唐草紋は圓線を表現したもので、同様の模様は浜松城跡から複数種が確認されている。本例は唐草紋の単位が彎曲をもつ比較的長く表現されるもので、近い模様の軒平瓦として〔浜松市教委1996〕の図16-45があげられる。2はヘラ書きがみられる平瓦である。凸面に文字が刻まれているが、表面が削り取られた部分があり、判読することができない。

3～5は3層から出土した丸瓦である。3の凹面には細かい布目が残る。4は凸面に網目タタキが、凹面にコビキA技法（森田1984）状の斜め方向の条線がみられる資料である。5は凸面に格子タタキの痕跡が観察できる資料である。凹面にはコビキB技法（森田1984）と吊り紐状の痕跡が残る。4には16世紀に遡りうる古相の特徴が看取できる。1トレンチはすべて攪乱層のため、かつて存在した遺構にかかわる情報が得られなかつたが、近辺に古い時期の施設が存在していた可能性が高い。

**2トレンチ出土遺物 (Fig. 21)** 6は、3層から出土した瀬戸美濃産の灰釉丸皿である。大窓3段階前半に相当する。7は、同じく3層から出土した白磁の皿である。詳細な時期は不明である。

8・9は軒平瓦である。8は均整唐草紋の外側の一単位がみられるが、全体形状は明らかでない。本例は、瓦当模様から外側の部分が大きい点に特徴がある。9は中心飾りの一部のみが遺存する。

10・11は軒丸瓦である。10は桔梗紋が表現されており、太田氏在城期（1644年～1678年）の所産と捉えられる。11は三ツ巴紋であるが、堀尾期と比べると巴紋が大振りである。明確な時期は示しにくいが、近世でも後半の所産である可能性が高い。

12は平瓦で、小口面に「山」字状の刻印がみられる。13～15は3層から出土した丸瓦である。13は瓦当面を欠失した丸瓦で、凹面には細かい布目痕とコビキB技法が観察できる。14・15とも凹面には内タタキの痕跡が確認できる。16は輪違い瓦である。凹面には布面痕とタタキの痕跡が観

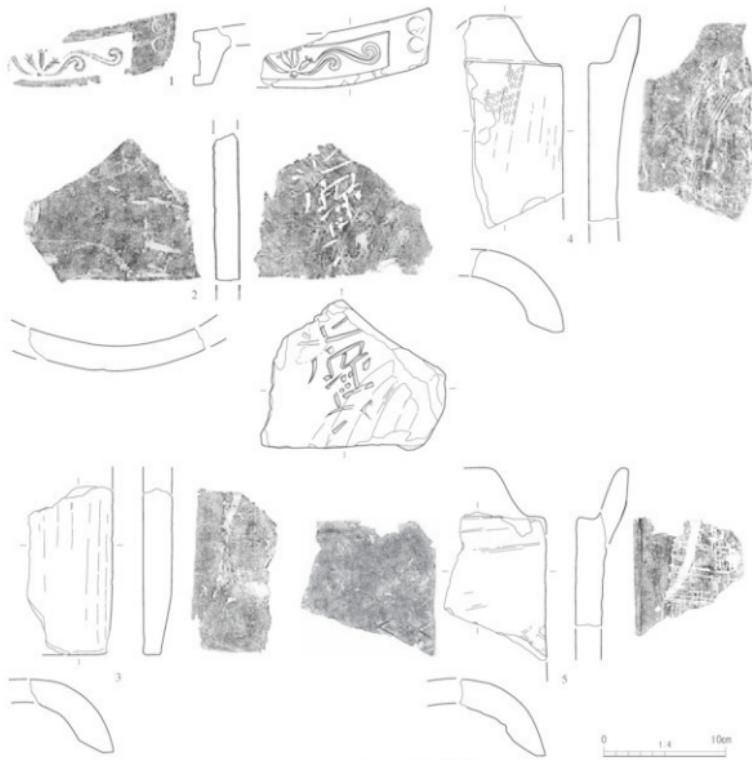


Fig. 20 1トレンチ出土遺物

察できる。17は鬼瓦の破片と考えられるが、遺存部分が小さく、詳細を知ることができない。

**3 トレンチ出土遺物 (Fig. 22)** 18～22は、SD05から出土したかわらけである。いずれも非ロクロ成形されたもので、直径は10.0～10.8cm、高さ1.6～2.2cmである。

23・24は、SD06北岸の4-4層から出土したかわらけである。底部は欠損しているが、ロクロ成形されており、底部には糸切り痕が残ると想定できる。23の口径復元値は12.5cm、9の口径復元値は14.3cmである。25はSD06の北岸の4-5層から出土した瀬戸美濃産の灰釉腰折皿である。口径11.4cm、高さ2.2cmであり、内面全面に緑灰色の灰釉が良好に発色している。古瀬戸後IV期新段階に位置づけられる。

26～28は土師器の煮沸具である。26はSD06の4-1層から、27と28はSD06北岸の4-5層から出土した。26は15世紀後半～16世紀前半頃の羽釜、27は球胴状の胴部をもつ内彎口縁内耳鍋、28は平坦な底部を有する屈曲内彎口縁内耳鍋である。27は尾張から三河に多い形態である。一方、28は遠江において一般的な内耳鍋である。形態的な特徴から、16世紀後半頃のものと捉えられる。

29はSD06の上位層である擾乱層(2層)から出土した丸に横一の刻印をもつ引掛棧瓦で、現代の

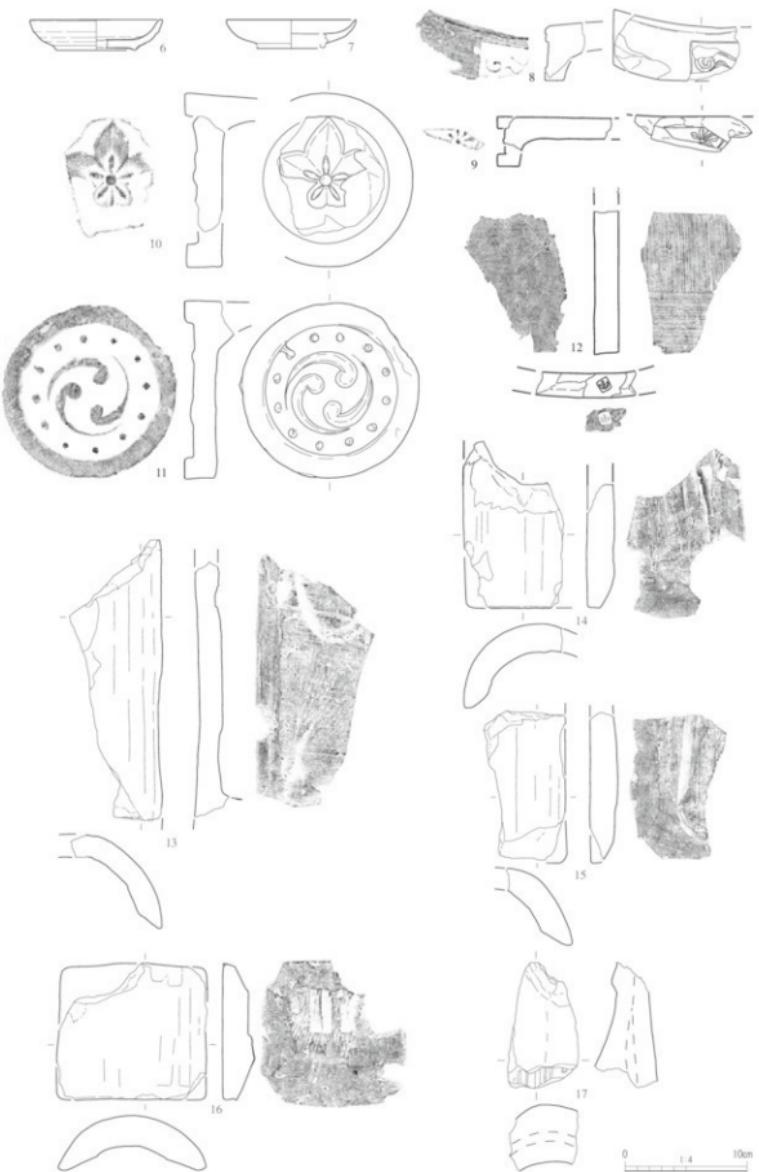


Fig. 21-2 トレンチ出土遺物

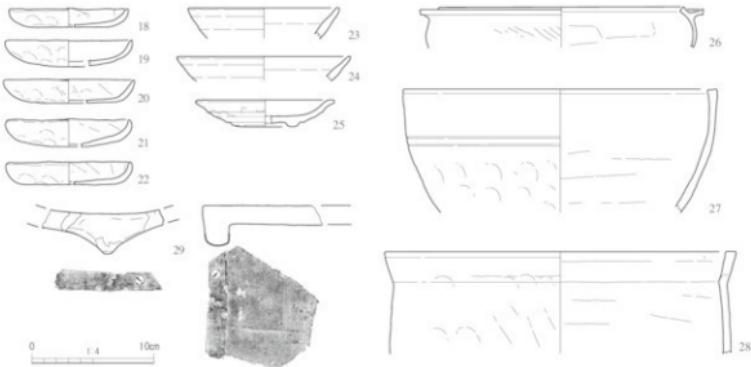


Fig. 22 3トレンチ出土遺物

ものである。

**4 トレンチ出土遺物 (Fig. 23)** 30はSD04から出土した瀬戸美濃産の天目茶碗である。大窯3段階に位置づけられる。31は同じくSD04から出土した美濃産徳利の口縁である。焼成や胎土、形態の特徴から近代のものと考えられる。32はSD06南岸の盛土層(3-4層)から出土した瀬戸美濃産の黄天目茶碗である。大窯2段階と捉えられる。33はSD06の4-3層から出土した須恵器坏である。7世紀を中心とした古代の遺物と捉えられる。直接城郭に伴うものではないが、浜松城跡からは古代の遺物が広範囲で出土する。

34は4トレンチから出土した棟瓦である。省略化が進んだ唐草紋に大振りの巴紋が伴う。35は4トレンチから出土した円形の端面をもつ大型瓦か一字鬼瓦の破片である。円形端面の中心部分には孔がみられる。全体の形状は不明である。

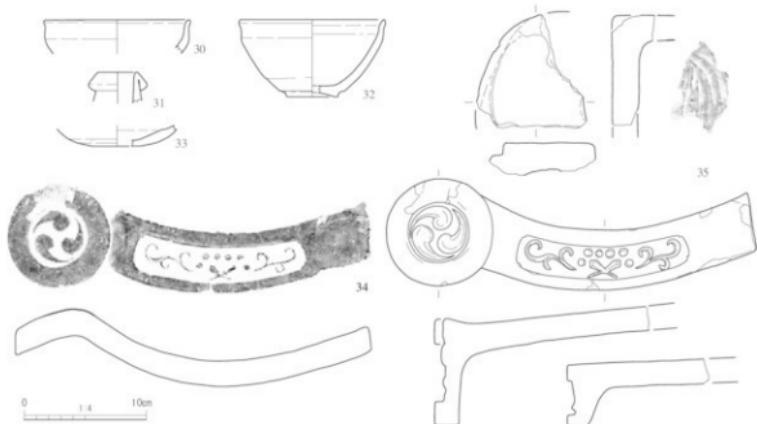


Fig. 23 4トレンチ出土遺物

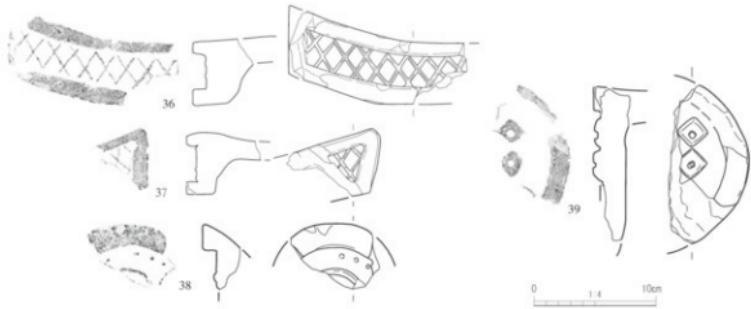


Fig. 24 5トレンチ出土遺物

5トレンチ出土遺物 (Fig. 24) 36・37は5トレンチ上層の2層から出土した軒平瓦である。通常の均整唐草紋ではなく斜格子の模様がみられる。近い模様の軒平瓦として[浜松市教委1996]の図16-52があげられる。斜格子紋の軒平瓦は、浜松城跡では比較的類例が限られる。今回の調査においても5トレンチから出土したのみである。特定の建物に葺かれたものであった可能性があるだろう。

38は鳥伏間瓦である。瓦当模様は巴紋である。39は軒丸瓦である。繋ぎ九つ目結い紋が表現されており、本庄(松平)氏在城期(1702年～1729年、1749年～1758年)の製作と捉えられる。

#### (9) 小 結

1・2トレンチでは、近代以降の擾乱層のみが確認できた。調査当初に想定していた堀跡などは検出できなかつたが、堀跡(空堀)が近代以降の耕作によって土壤化された可能性が考えられた。出土遺物も近代以降のものが多いが、16世紀に遡る時期の遺物も若干ながら得られており、調査区の周間に何らかの遺構があったと捉えられる。

3・4トレンチでは、本丸南側に設けられた戦国時代に遡る堀跡(SD06)を確認した。SD06は自然地形を利用して整えた遺構とみられ、下層の埋土は自然堆積層、上層の埋土は埋立て層と整地層に分離できる。出土遺物には、遠江の特徴を持つ内耳鍋やかわらけ、尾張・三河の特徴を持つ羽釜・内耳鍋があり、築城工事に動員された人々によつてもたらされたものである可能性が考えられる。遺構が形成された時期は、16世紀後半とみられるが、その他の時期の遺構かは、今後の詳細な検討が必要である。

5・6トレンチでは、本丸南側に設けられた石垣(SL02)を検出した。石垣は珪岩を用いた野面積みで、天守曲輪の石垣と石材、技法が共通する。堀尾吉晴在城期(1590年～1600年)に構築された可能性が高く、その姿は近代まで確認することができたものとみられる。この石垣の上には先述したように長屋状の多間櫓が存在し、東側には本丸への表門である鉄門が設けられていた。

## 2 天守曲輪南側石垣及び空堀跡の調査

### (1) 概要

**位置** 天守曲輪の周辺では、Fig. 12の西端城曲輪の中心部分において東西方向に設けた7トレンチと天守曲輪の南面に南北方向に設けた8トレンチの二つの調査溝を設定した。7トレンチは天守曲輪石垣の根石部分を確認した7-1トレンチ、天守曲輪の土星腰巻部分に設定した7-2トレンチ、天守曲輪と西端城曲輪境の堀を確認した7-3Nトレンチと7-3Sトレンチに分けられる。8トレンチも同様に、天守曲輪石垣の根石部分を確認した8-1トレンチ、天守曲輪の土星腰巻部分に設定した8-2トレンチ、天守曲輪南側の堀を確認した8-3トレンチに分けられる。

**層位** 天守曲輪南側で確認できる基本土層は、上層より1層(現代の堆積・整地層)である表土層と竹矢来基礎の掘削擾乱層)、2層(近現代の掘削・埋土層である擾乱層)、3層(戦国期・近世～近現代の堆積・整地層)、4層(戦国期の埋土層)、5層(新生代第四期更新世の地山層)に大きく区分することができる。天守曲輪南側斜面での5層は、西端城曲輪の7トレンチでの状況と同じで、多量の円礫を混じえるシルト質細砂～中砂であり東鶴江累層上位の三方原礫層と考えられる。

### (2) 7トレンチ検出遺構

**遺構の概要** (Fig. 25・26) 7トレンチは、天守曲輪南西側の屏風折石垣の南から、山裾の空堀跡を越えて西端城曲輪に立木や柵等の障害物を避けて設けた、主軸を同じくするがトレンチ間を開ける延長約28mの7-1～3の3トレンチからなる調査溝である。最も北東の石垣下急斜面に設けた7-1トレンチでは、天守曲輪南側石垣(SL01)の根石を確認した。中央の7-2トレンチでは、土星下の腰巻石垣の確認を行ったが、石垣は存在せず、天守曲輪は鉢巻石垣のみであることが明らかとなった。南西平場に設けた7-3トレンチは、児童公園の園路縁石により北側を7-3Nトレンチ、南側を7-3Sトレンチとし、ここから中土手をもつSD01とSD02の2本の堀跡を検出した。

**天守曲輪南側石垣(SL01)** (Fig. 25) 天守曲輪石垣(SL01)の根石は、表土層(1-1層)下1.2mにおいて検出した。根石は固く締まった盛土層(4-2層)上の標高33.03m付近に、直接並べ置かれていた。また、根石から2段目である高さ0.3m余りから前面1m余りには、角礫を含む固く締めた4-1層によって斜めに盛土が行われていた。根石を保護するための盛土とも考えられる。さらに、この根石の前面には、4-2層に埋め込まれた0.2～0.3m角の3石が、根石に接して並行に埋め込まれていた。この様な状況は、8-1トレンチにおいても見られた。この石列は根石の下に組み込まれていないため、胴飼石や捨石等の構造材とは異なる。水堀の石垣で、石垣基礎部分が前方に迫り出さないようにするために、「ソゲ石」と呼ばれる割れ石を根石の前面に積む工法があるが、これに近いものかも知れないが不明といわざるを得ない。

石積はSL02と同じ自然石の小口面か長侧面を石面とした、野面積である。現存する石垣高は3.5m(標高33.03～36.53m)であり、布積の17～18段分が残存している。使用石材はSL02と同じ珪岩である。石面の勾配(矩)は、現状では根石から7段目までが約72度、これより上が約58度となっている。上段では明らかな積み直しが見られるので、下段の孕みはそのままとし、上段のみ修復した結果と思われる。当初の勾配は、根石から天端石までが65度前後ではなかつたかと考えられる。また、埋まっていた築石の間には、地表に出ている築石間よりも間詰石が多数みられた。

**7-1トレンチ遺物出土状況** 7-1トレンチからは丸瓦(45・46)や多数の瓦が出土した。いずれも

石垣上から落ちて堆積した1・3層中から出土したものである。

**堀跡 (SD01・02)** (Fig. 26) 天守曲輪をめぐる堀跡 (SD01・02) を、7-2トレーニチから7-3Sトレーニチにかけて検出した。天守曲輪南側石垣 (SL01) 下の土星は、根石端 (標高33.03 m) から7 m南西の土星端 (標高28.0 m余り) まで約5mの高低差がある。勾配については、石垣下が18度の緩斜面であるのに対し、腰巻部では48度前後の急傾斜としている。

土星下の堀跡は、天守曲輪と西端城曲輪を掘り切るような形で、二重に横堀がめぐっている。天守曲輪側をSD01、西端城曲輪側をSD02とする。堀の中央には中土手を掘り残している。土星側の肩部が検出できていないが、現況の段差から判断して7-2トレーニチが堀跡の南西端に相当すると考

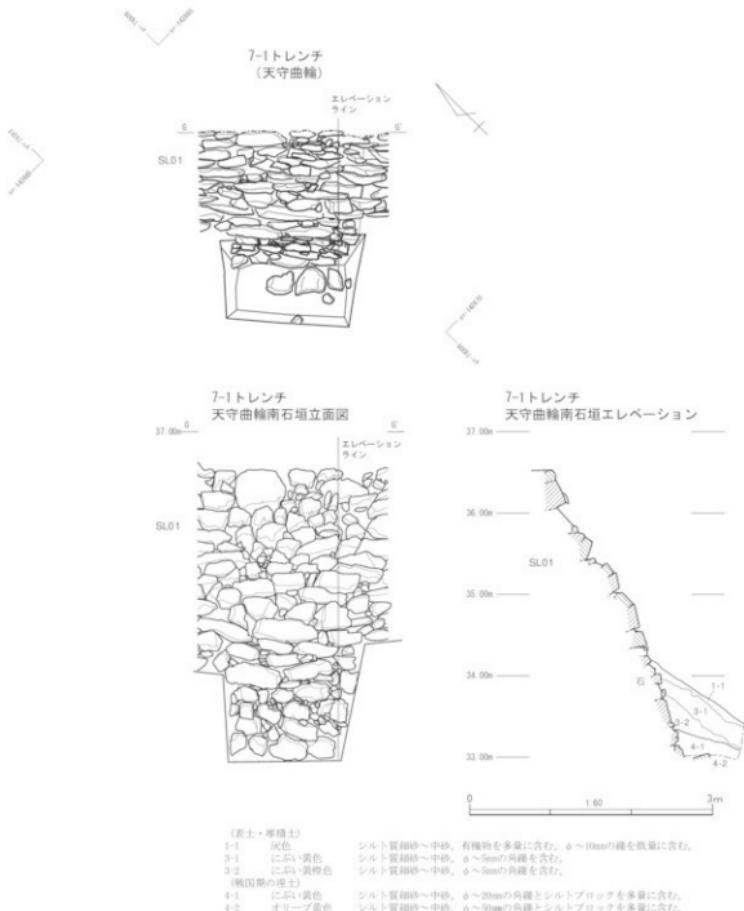
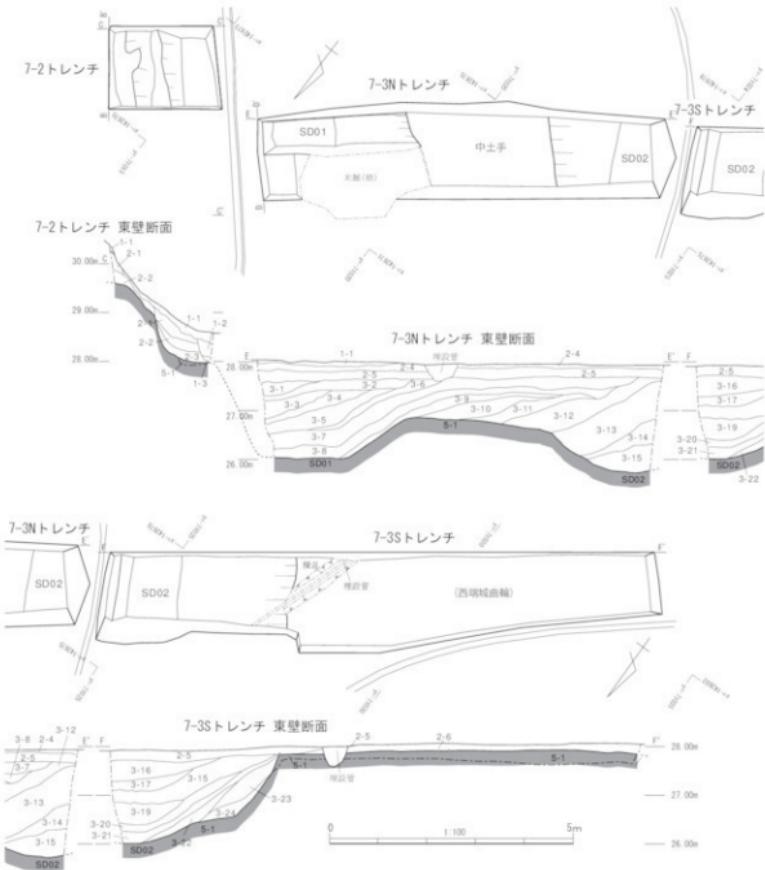


Fig. 25 7-1トレーニチ実測図



#### (表土・構造)

- |            |   |             |                             |
|------------|---|-------------|-----------------------------|
| 1-1 植灰色    | シルト質砂礫～粗砂。有機物とφ～30mmの円鏡を多量に含む。          | 3-11 にじみ黄褐色 | シルト質細砂。φ～70mmの円鏡を含む。        |
| 1-2 蒼灰黃色   | シルト質砂礫～中砂。落葉層・草木などの有機物とφ～60mmの円鏡を多量に含む。 | 3-12 にじみ黄褐色 | シルト質細砂～粗砂。φ～140mmの円鏡を多量に含む。 |
| 1-3 暗オリーブ色 | シルト質砂礫～中砂。落葉層・草木などの有機物とφ～60mmの円鏡を多量に含む。 | 3-13 灰灰褐色   | シルト質細砂。φ～110mmの円鏡を含む。       |
| 2-1 土黄色    | シルト質砂礫～中砂。φ～50mmの円鏡を多量に含む。              | 3-14 にじみ褐色  | シルト質細砂～粗砂。                  |
| 2-2 にじみ黃色  | シルト質砂礫～中砂。φ～50mmの円鏡を多量に含む。              | 3-15 にじみ褐色  | φ～30mmの円鏡を多量に含む。            |
| 2-3 黄褐色    | シルト質砂礫～粗砂。φ～50mmの円鏡を含む。                 | 3-16 にじみ褐色  | シルト質細砂～粗砂。                  |
| 2-4 土黄色    | シルト質砂礫～粗砂。φ～60mmの円鏡を多量に含む。              | 3-17 にじみ黄色  | シルト質細砂。φ～30mmの円鏡を含む。        |
| 2-5 土灰褐色   | シルト質砂礫～粗砂。φ～120mmの円鏡を多量に含む。             | 3-18 にじみ黄色  | シルト質細砂。φ～30mmの円鏡を含む。        |
| 2-6 褐灰色    | シルト質砂礫～粗砂。φ～30mmの円鏡を含む。                 | 3-19 黄褐色    | シルト質細砂。φ～60mmの円鏡を含む。        |
| 3-1 にじみ黄褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～30mmの円鏡を多量に含む。              | 3-20 にじみ黄褐色 | シルト質細砂。φ～10mmの円鏡を僅かに含む。     |
| 3-2 黄褐色    | シルト質砂礫～粗砂。φ～40mmの円鏡を多量に含む。              | 3-21 黄褐色    | シルト質細砂～粗砂。                  |
| 3-3 黄褐色    | シルト質砂礫～粗砂。φ～100mmの円鏡を含む。                | 3-22 にじみ褐色  | シルト質細砂～粗砂。                  |
| 3-4 にじみ黄褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～40mmの円鏡を含む。                 | 3-23 にじみ黄色  | シルト質細砂。φ～30mmの円鏡を含む。        |
| 3-5 にじみ黃褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～60mmの円鏡を含む。                 | 3-24 にじみ赤褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～10mmの円鏡を含む。     |
| 3-6 にじみ黃褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～70mmの円鏡とφ～180mmの円鏡を含む。      | 3-25 山地     | (山地)                        |
| 3-7 にじみ黄褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～70mmの円鏡とφ～150mmの円鏡を多量に含む。   | 3-26 にじみ褐色  | シルト質細砂～中砂。φ～30mmの円鏡を含む。     |
| 3-8 にじみ黄褐色 | 有機物を微量に含む。                              | 3-27 地山層    | 地山層。                        |
| 3-9 にじみ黄褐色 | シルト質砂礫～粗砂。φ～60mmの円鏡を多量に含む。              |             |                             |
| 3-10 にじみ褐色 | シルト質砂礫。φ～100mmの円鏡を含む。                   |             |                             |

Fig. 26 7-2・3N・3Sトレーンチ実測図

えると、土壘側肩部（標高約28.0 m）から西端城曲輪側肩部（標高27.82 m）まで、堀跡全体の上端幅が13.42 m、深さはSD02下の最深部（標高25.80 m）で約2.2 mである。最深部の標高は、現況の本丸平場の高さ（標高約25 m）よりも高い。

SD01の規模は、上端幅が約4 m、深さは中土手側で0.85 m、土壘側で約2 m、底幅は1.55～1.7 mである。土壘側斜面の勾配は約58～62度と推定され、中土手側が35度である。中土手は上面が南に傾き、上端の幅が3.0 m、下端の幅が約5.3 m、高さは0.77～0.85 mである。SD02の規模は、上端幅が6.42 m、深さは中土手側が0.77 m、西端城曲輪側が2.02 m、底幅は3.05 mである。西端城曲輪側斜面は崩落がみられるが、その勾配は約55度、中土手側が33度である。西端城曲輪側肩部と現況の天守曲輪天端石（標高36.53 m）との比高は、およそ8.7 mである。

SD02の埋土には、表土層（1層）及び整地層（2層）の下に3-1～24層のシルト質細砂～粗砂に礫を多量に含む埋立て層が見られる。この埋立て層は全て西端城曲輪側である南西から盛られており、現況の平場を作るための造成工事によるものと考えられる。

なお、西端城曲輪の上面（標高27.85 m）からは、特に遺構は検出されなかった。

**SD01・02 遺物出土状況** 出土遺物には、7-2トレーナー・2層から出土した渥美湖西産甕（42）、堀瓦（47）や、7-3Nトレーナー・2層から出土した青磁筒碗（40）、3層から出土した瀬戸美濃産天目茶碗（41）、常滑産甕（43）、丸瓦（48・49）があげられる。またこの他にも多数の瓦や近現代の陶磁器があり、表採品として唐草紋軒平瓦（44）がある。

### （3）8トレーナー検出遺構

**遺構の概要** (Fig. 27・28) 8トレーナーは、天守曲輪南側石垣（SL01）から山裾の空堀跡まで、立木や遊具等の障害物を避けて設けた、主軸を同じくするがトレーナー間を空ける延長約13.6 mの8-1～3の3トレーナーからなる試掘溝である。石垣直下斜面に設けた8-1トレーナーでは、天守曲輪南側石垣（SL01）の根石を確認した。中央の土壘腰巻部端に設けた8-2トレーナーでは、7-2トレーナー同様に腰巻石垣は存在しなかった。南側平場に設けた8-3トレーナーからは、深い堀跡（SD03）を確認したが、外側の立ち上がりを確認できず、その規模を明らかに出来なかった。

**天守曲輪南側石垣（SL01）** (Fig. 27) 根石は布積約2段分を、表土層（1-1層）下0.6 mにおいて検出した。根石は固く締まった盛土層（4-2層）上の標高30.84 m付近に、直接横並びに置かれていた。また、根石から1段目上である高さ0.3 m余りから前面0.8 m余りには、7-1トレーナーと同じ様に斜めに盛土（4-1層）が行われていた。

石積は自然石による野面積である。現存する石垣高は5.24 m（標高30.84～36.08 m）、布積の18～20段分が残存している。使用石材は全て珪岩である。石面の勾配（矩）は、根石から天端石までに雨落しなどの反りは無く、直線的な約62度となっている。下段では僅かに孕みが見られる。間詰石が多数嵌め込まれている。

**8-1トレーナー遺物出土状況** 石垣上から落ちて堆積した1・3層から、三ツ巴紋軒丸瓦（51）や繋ぎ九つ目結い紋軒丸瓦（52）、丸瓦（53）、堀瓦（55）が出土した。この他、多数の瓦と近現代の陶磁器が出土した。

**堀跡（SD03）** (Fig. 28) SD03は、8-2トレーナーから8-3トレーナーにかけて検出した堀跡である。土壘肩部から南側は遺構の規模が大きく、堀底などの外形を確認できなかった。天守曲輪南側石垣（SL01）下の土壘は、根石端（標高30.84 m）から5.4 m南側の土壘端（標高27.8 m）までに約3 m下がる。勾配は石垣下の12度から、腰巻部では34度以上の傾斜がみられる。SD03全体の規模は、

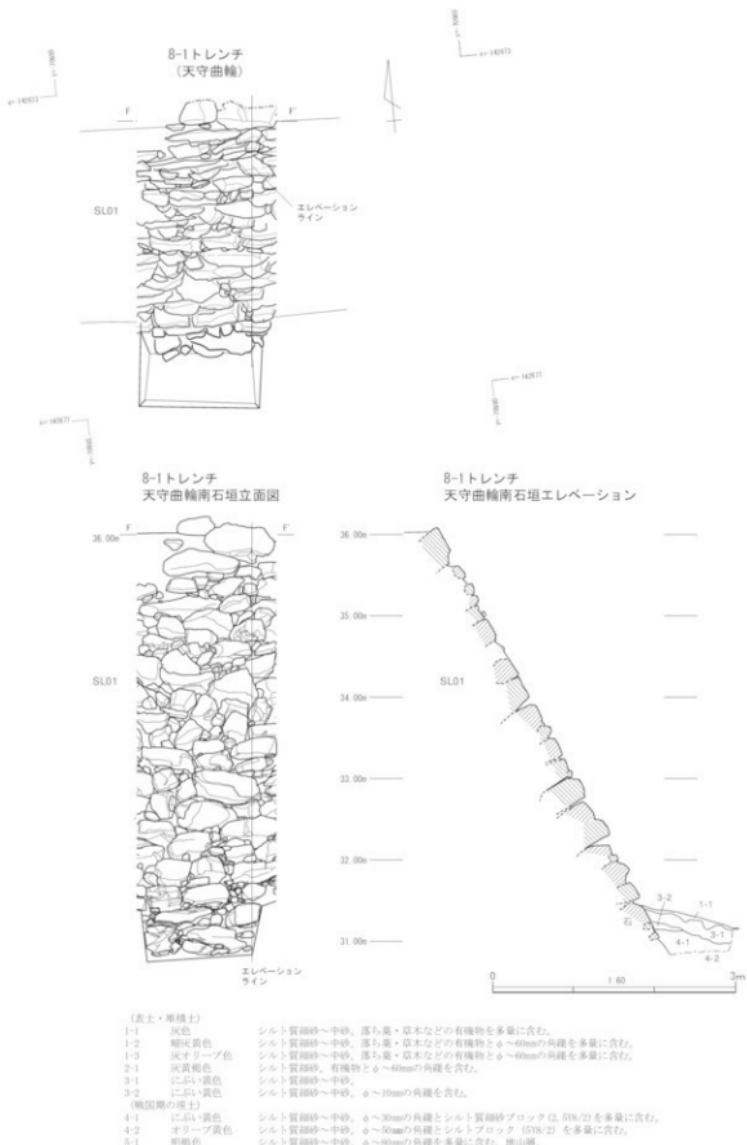
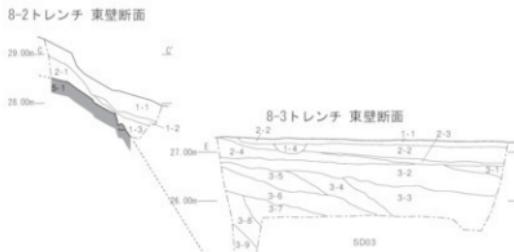
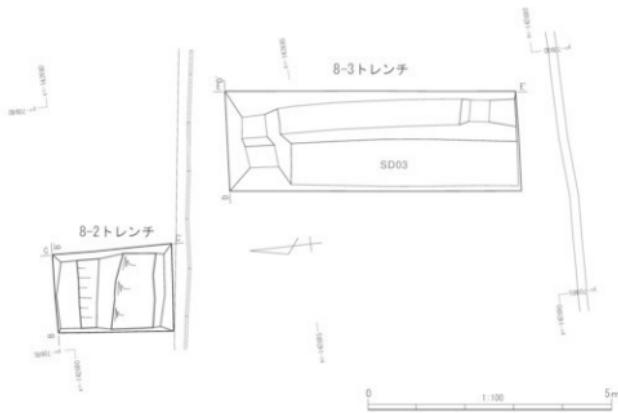


Fig. 27 8-1 トレンチ実測図

不明である。8-2トレーニング南端の擾乱により形成された肩部から8-3トレーニング南端までの幅は8.2 mである。深さについても、明確でない。底部の検出を目指し、標高24.8 mまで（表土から3mほど）掘削したが、堀底まで達しなかった。天守曲輪南側土壌肩部からSD03への勾配は、8-2トレーニングから58度余りの急勾配で下がっているようである。

SD03の埋土層（3-1～9層）は、円錐を多量に含むシルト質細砂～粗砂の層で、土壌側の北側から埋められていた。これらの埋土は、7トレーニングと全く同じものであり、同時期に造成工事として



(表土・機走)		
1-1	灰色	シルト混じりの細砂～中砂。
1-2	暗灰灰黄色	シルト質細砂～粗砂。落ち葉・草木などの有機物とφ～60mmの角錐を多量に含む。
1-3	灰オリーブ色	シルト質細砂～粗砂。落ち葉・草木などの有機物とφ～60mmの角錐を多量に含む。
1-4	灰褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～20mm未満の角錐を含む。
2-1	灰黄褐色	シルト質細砂。有機物とφ～60mmの角錐を含む。
2-2	にじみ黄色	シルト質細砂～粗砂。φ～50mmの角錐を多量に含む。
2-3	灰オリーブ色	シルト質細砂～粗砂。
2-4	灰オリーブ色 (埋土)	シルト質細砂～粗砂。φ～50mmの角錐を多量に含む。
3-1	暗灰灰黄色	シルト質細砂～粗砂。φ～40mmの角錐を多量に含む。
3-2	にじみ黄褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～50mmの角錐とφ～20mmの角錐を多量に含む。
3-3	灰褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～50mmの角錐を多量に含む。
3-4	灰黃褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～60mmの角錐を多量に含む。
3-5	灰褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～30mmの角錐を多量に含む。
3-6	灰オリーブ色	シルト質細砂～粗砂。φ～30mmの角錐を多量に含む。
3-7	灰オリーブ色	シルト質細砂～粗砂。φ～20mmの角錐を多量に含む。
3-8	黄褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～40mmの角錐を多量に含む。
3-9	暗灰褐色	シルト質細砂～粗砂。φ～60mmの角錐を多量に含む。
(地山)		
3-1	明褐色	シルト質細砂～中砂。φ～80mmの角錐を多量に含む。地山層。

Fig. 28 8-2・3トレーニング実測図

埋められたことを示すものである。

**SD03遺物出土状況** 出土遺物には、1～3層から出土した丸瓦（54）や堀瓦（56）がある。この他、多数の瓦と近現代の陶磁器も出土している。また、SD03上面における表採品として「文久永宝」（50）がある。

#### （4）出土遺物

**7トレンチ出土遺物** (Fig. 29) 40は7-3Nトレンチの1・2層から出土した青磁筒碗である。時期は不明である。41は7-3Nトレンチの3層から出土した瀬戸美濃産の天目茶碗である。大窯3段階前半に位置づけられる。42は7-2トレンチの1・2層から出土した渥美湖西産の甕である。概ね12世紀末頃を中心とした時期とみられる。43は7-3Nトレンチの3層から出土した常滑産の甕の胴部である。

44は7-3トレンチの表土層から採集した軒平瓦である。中心飾りから1単位目と2単位目の唐草紋が遺存する。それぞれの単位が近接している点が特徴的であるが、遺存部分が少なく、浜松城跡における類例を示すことが難しい。

45・46は7-1トレンチの1・3層から出土した丸瓦である。45の凹面には吊り紐の痕跡、横方向の縫い取り痕、コビキA技法が看取でき、堀尾吉晴在城期の所産とみられる。46の凹面にはやや粗い布目がみられる。

47は7-2トレンチから出土した堀瓦である。端面に沿って一条の沈線が入れられている。48は7-3Nトレンチの3層から出土した丸瓦である。凹面には細かな布目痕と横方向の縫い取り痕跡がみられる。49は7-3Nトレンチから出土した丸瓦である。凹面にはコビキA技法が観察できる。48・49ともに16世紀末まで遡る可能性がある。

**8トレンチ出土遺物** (Fig. 30) 50は8-3トレンチから表面採集した文久永宝（初鑄1863年）である。

51は8-1トレンチから出土した軒丸瓦である。直径13cm以下の小型品であり、尾の長い三ツ巴紋が表現されている。模様の特徴から、堀尾吉晴在城期（1590年～1600年）の所産と捉えられる。

52は、8-1トレンチから出土した家紋瓦である。通常の軒丸瓦と異なり、緩やかに彎曲する大型の瓦である。何らかの道具瓦とみられるが、どのような形態のものか判然としない。家紋は繋ぎ九つ目結い紋が表現されており、本庄（松平）氏在城期（1702年～1729年、1749年～1758年）の製作と捉えられる。

53は8-1Nトレンチの1・3層から出土した丸瓦である。凹面には布目と内タタキの痕跡が観察できる。54は8-3トレンチの3層から出土した丸瓦である。凹面には縦方向のコビキ痕跡がみられる。55・56は堀瓦である。55は8-1トレンチの1・3層から、56は8-3トレンチの2・3層から出土した。ともに、棟の部分がうかがえる資料である。

#### （5）小 結

7トレンチでは、天守曲輪石垣（SL01）の根石と西端城曲輪に接する空堀（SD01・02）を確認した。天守曲輪の石垣は鉢巻部分のみで、腰巻部分は直接堀に接する。天守曲輪石垣の根石の外側には石垣と接しない石列が確認できた。この石列は根石の下に組み込まれていないため、石垣基礎部分が前方に迫り出さないようにするための、「ソゲ石」と呼ばれる根固め石である可能性があるが、不詳といわざるを得ない。西端城曲輪側の空堀（SD01・02）は、天守曲輪と西端城曲輪の尾根を断

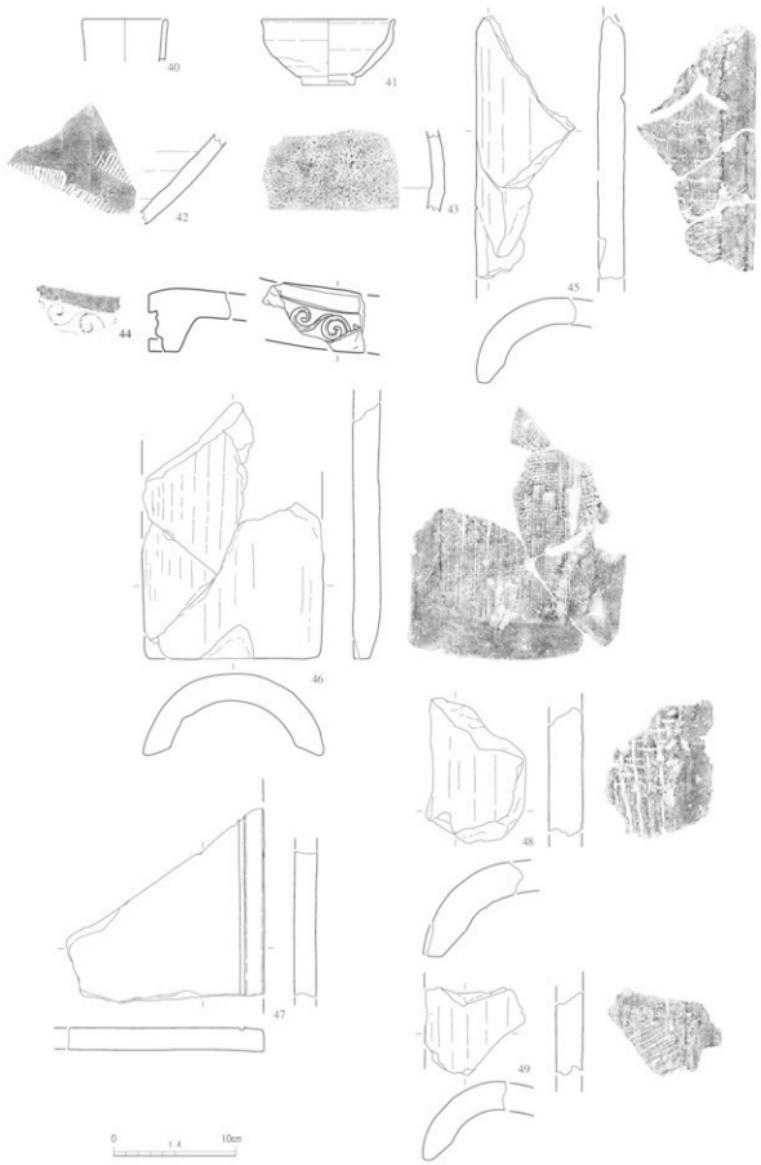


Fig. 29-7 トレンチ出土遺物

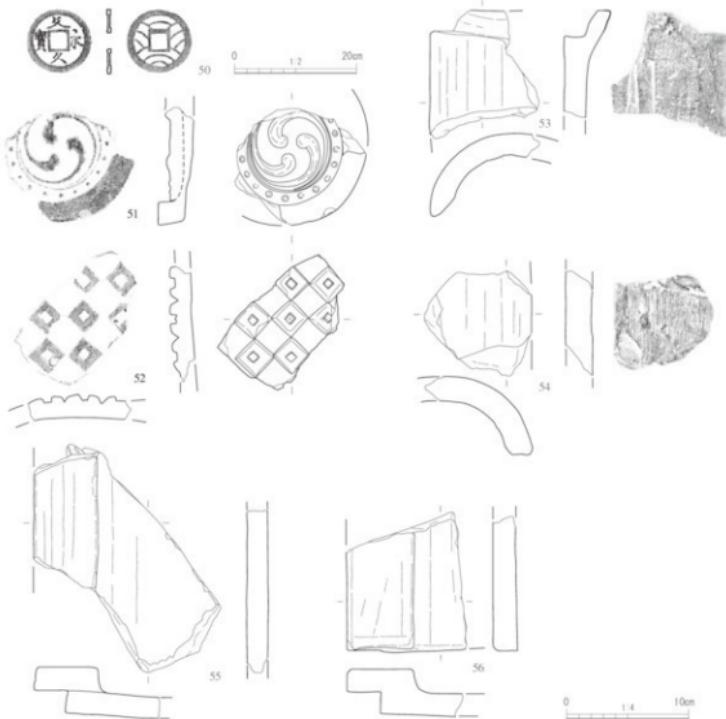


Fig. 30 8 トレンチ出土遺物

ち切るように設けられた、中土手をもつ二重の横堀であることが判明した。トレンチにおいて確認した空堀の上端幅は13.42 m、最深部の深さは2.2 mである。堀底の高さは、現況の本丸曲輪の高さよりも高く、8トレンチの空堀とは性格を異なるものとみられる。さらに、西側延長部がどこまで延びるかも不明である。空堀の埋土は、西端城曲輪側から急激に埋められた様相が認められる。埋土に含まれる遺物から、空堀が埋め立てられたのは20世紀中頃の比較的最近のことと考えられる。

8トレンチにおいても天守曲輪石垣(SL01)の根石とその南側に接する空堀(SD03)を確認した。石垣から空堀に移行する構造は7トレンチと同様であるが、空堀の規模が大きく、今回の調査で堀の底面をはじめその詳細を明らかにすることはできなかった。現在、当該地は西端城曲輪と同じ高さに造成されているが、本来は天守曲輪石垣(SL01)下の土壘から清水曲輪に移行する崖状の急斜面地と空堀であったとみられる。その高低差は、5トレンチの本丸南側曲輪石垣の根石下と天守曲輪石垣天堀から計測すると約17.5 mあり、これに空堀自体の深さが加わることとなる。角度と共に極めて防御性の高い58度余りの傾斜構造であったと考えることができる。

Tab. 2 出土遺物觀察表

Fig.	遺物 No.	レジン No.	取上 No.	構造	層 位	種 別	細 別	残存率	反転	口径・ 幅	脚高・ 長さ	底径・ 厚さ	色 調	備 考	
20	1	1		3層	瓦	軒平瓦							灰	唐草紋	
20	2	1		3層	瓦	平瓦				2.0			にぶい黄橙	ヘラ書き有	
20	3	1		3層	瓦	平瓦				2.4			灰	繩目	
20	4	1		3層	瓦	平瓦				3.7			灰白	コビキA 一部布目 満目タタキ	
20	5	1		3層	瓦	平瓦				2.4			黄灰	コビキB 吊り紐路有	
21	6	2		3層	陶器	灰釉丸皿	30	反	10.8	2.5	6.4		灰黄	輪:灰オリーブ色 澄戸美濃産	
21	7	2		3層	磁器	白磁皿		反	10.6				灰白	中国窯か?	
21	8	2		3層	瓦	軒平瓦							灰白	唐草紋	
21	9	2		3層	瓦	軒平瓦					1.7		黄灰	中心飾り	
21	10	2		3層	瓦	軒丸瓦							灰黄	粘ねじ紋	
21	11	2		3層	瓦	軒丸瓦							灰白	三ツ巴紋	
21	12	2		3層	瓦	平瓦				2.0			灰黄	口内に「山」刻印有	
21	13	2		3層	瓦	軒丸瓦				2.7			灰	瓦当面欠失 コビキB 繩布目	
21	14	2		3層	瓦	丸瓦				2.3			布目	内タタキ	
21	15	2		3層	瓦	丸瓦				2.3			布目	内タタキ	
21	16	2		3層	瓦	輪違い瓦				2.6			布目	内タタキ	
21	17	2		3層	瓦	鬼瓦か				5.0			灰白		
22	18	3	SD05	3-9層	土器器	かわらけ	40	反	9.6	1.5	5.4		灰白	非クロ成形	
22	19	3	C1	SD05	3-9層	土器器	かわらけ	50	反	10.3	2.2		灰白	非クロ成形	
22	20	3	SD05	3-9層	土器器	かわらけ	50		10.6	1.9	8.0		灰白	非クロ成形	
22	21	3	C3	SD05	3-9層	土器器	かわらけ	50	反	9.8	2.2	7.0		灰白	非クロ成形
22	22	3	C3	SD05	3-9層	土器器	かわらけ	40		10.4	1.8	8.0		灰白	非クロ成形
22	23	3	SD06	4-4層	土器器	かわらけ	10以下	反	12.4				灰白	ロクロ成形	
22	24	3	SD06	4-4層	土器器	かわらけ	10以下	反	14.2				灰白	ロクロ成形	
22	25	3	SD06	4-5層	陶器	灰釉鋸折皿	40	反	11.0	2.2	5.4		灰白	輪:灰オリーブ色 澄戸美濃産	
22	26	3	SD06	4-1層	土器器	羽垂	10以下	反	20.0				灰白	蝶付着	
22	27	3	SD06	4-5層	土器器	内側口縁 内耳縁	10以下	反	25.8				灰褐色	蝶付着	
22	28	3	C5	SD06	4-5層	土器器	屈曲内側口 縁内耳縁	10	反	28.8			にぶい黄橙	蝶付着	
22	29	3	北岸	4-4層	土器器	かわらけ	10以下	反				1.5	黄灰	○内に「一」刻印有 現代	
23	30	4	SD04	①	陶器	天日系碗	10以下	反	11.8				灰黄	輪:暗赤褐色 澄戸美濃産	
23	31	4	SD04	①	陶器	滑利	10以下	反	3.1				灰黄	輪:灰白色 美濃産 近代	
23	32	4	SD06	南岸	3-4層	陶器	黄天日系碗	50	反	11.8	6.3	4.2	淡黄	輪:淡黄色 澄戸美濃産	
23	33	4	SD06	4-3層	須恵器	坪	10以下	反		4.0			灰白	T字頃か?	
23	34	4		2層	瓦	軒枝瓦			30.2			2.1	灰	三ツ巴紋	
23	35	4		2層	瓦	不明						2.2	灰白	大型瓦か、一字彫瓦か?	
24	36	5		2層	瓦	軒平瓦							灰白	斜格子紋	
24	37	5		2層	瓦	軒平瓦				1.5			灰	斜格子紋	
24	38	5	L2	石垣石間	瓦	軒伏開瓦							灰白	三ツ巴紋	
24	39	5	L1	石垣石間	瓦	軒丸瓦							灰	彫ぎ九つ目結い紋	
29	40	7-3N		1-2層	磁器	青磁筒碗	10	以下	反	6.8			灰白		
29	41	7-3N		3層	陶器	天日系碗	10	反	11.0				にぶい黄	澄戸美濃産	
29	42	7-2		1-2層	陶器	便	10以下						にぶい黄	澄美湖西産	
29	43	7-3N		3層	陶器	便	10以下						灰褐色	唐津産	
29	44	7-3N		表様	瓦	軒平瓦				2.2			灰褐色	唐草紋	
29	45	7-1		1-2層	瓦	丸瓦				2.2			灰白	コビキA 布目 吊り紐痕 取痕	
29	46	7-1		1-2層	瓦	丸瓦			14.7			2.2	にぶい黄	粗目	
29	47	7-2		1-2層	瓦	聊瓦				1.8			灰黄		
29	48	7-3N		3層	瓦	丸瓦				2.8			灰黄	繩目 取痕	
29	49	7-3N		3層	瓦	丸瓦				2.2			灰	コビキA	
30	50	8-3		表探	銅製品 (文久水宝)		100			2.6		0.1	灰黒	穿径 0.7 cm. 重量 4.0g	
30	51	8-1		1-2層	瓦	軒丸瓦							灰	三ツ巴紋、塚尾期の瓦とみられる	
30	52	8-1		1-2層	瓦	不明							灰黃褐色	彫ぎ九つ目結い紋、道具瓦か?	
30	53	8-1		1-2層	瓦	丸瓦				1.8			にぶい黄	粗目	
30	54	8-3		1-2層	瓦	丸瓦				2.1			灰	繩方向のコビキ痕	
30	55	8-1		1-2層	瓦	軒瓦				1.8			灰黄	株の部分	
30	56	8-3		1-2層	瓦	聊瓦				1.9			灰黄	株の部分	

凡例 残存率：%表示。10%単位での切り上げ

反転：断面を反転して図化したものを「反」と表示

大きさの単位はcm。口径は接地径

## 第3章 総括

今回の発掘調査によって、浜松城にかかる新しい情報を数多く得ることができた。最後に調査成果をふまえた評価を行い、総括としたい。

### 1 清水曲輪南端部の成果

**調査状況** 清水曲輪南端を調査した1・2トレーニチでは、近代以降の擾乱層が確認できたのみであり、城郭にかかる明確な遺構は検出できなかった。ただし、堀跡などが近代以降の造成等によって破壊されている可能性があり、今回の調査結果によって当該地における堀跡の存在が完全に否定できるとはいいがたい。1・2トレーニチの位置に推定されていた「実堀」や「包丁堀」の位置についても、さらなる探索が必要であろう。

**出土遺物の評価** 1・2トレーニチの出土遺物は、すべて擾乱層からの混入品であり、近現代の遺物が大半を占める。ただし、僅かであるが、大窯3段階前半（1560年頃～1570年代を中心とする）の灰釉丸皿（6）など、古い時期の遺物が含まれる点は注目できる。瓦についても、凸面に網目タタキ、凹面にコビキA技法状の斜め方向の条線がみられる丸瓦（4）が知られ、16世紀末まで廻りうる特徴が看取できる。今回の調査では遺構の状態が確認できなかつたが、1・2トレーニチの近辺に16世紀に廻る施設があった可能性が考えられる。

### 2 本丸南側の堀跡（SD06）の評価

**SD06の特徴** 本丸南側の3トレーニチと4トレーニチで確認された堀跡（SD06）は、遺構の形状と特徴、層位関係、出土遺物から戦国時代の遺構と考えられる。3トレーニチにおけるSD06の幅は9.72 m、深さは1.74 m、4トレーニチでの幅は13.2 mである（4トレーニチにおける深さは不明）。未調査箇所が多く、確定的とはいえないが、SD06は地山層を逆台形状に掘り込んだ「箱堀」状を呈するとみられる。

SD06は本丸南側の清水曲輪に設けられている。「安政元年浜松城絵図」（1854年頃作成）をみると、当該地近辺には、「清水場」と呼ばれる覆屋をもつ井戸が描かれている。この井戸は、西端城曲輪から東に入る谷状地「清水谷」に流れ込む湧水を利用したものであったとみられる。SD06は清水谷内の流路を利用しながら、形成した堀と考えてよいだろう。

SD06の埋土は、3トレーニチの調査状況から、①初期堆積層、②埋立て層、③整地層の大きく3つの層位に分けられる。①層は堀が機能していた頃の地層であり、自然堆積とみられる。これに対して、②層や③層は人為的に堀を埋め立て、整地がなされた際に盛られた地層であり、その形成期間は比較的短いと判断できる。②層からは比較的多くの遺物が出土しており、堀跡の廃絶時期をうかがう資料として注目できるだろう。これら出土遺物と浜松城の形成過程を総合的に検討することによって、堀跡の形成時期や廃棄の時期を明確にすることができます。

**出土遺物が示す時期** SD06からは、2点の瀬戸美濃産の施釉陶器が出土している。灰釉腰折皿（25、②層から出土）と黄天目茶碗（32、③層から出土）が該当し、それぞれ古瀬戸後IV期新段階、大窯2段階に位置づけられる。前者の実年代は1460～1470年代、後者の実年代は1530年～1560

年頃に相当させることができる（藤澤2007）。浜松城跡からの出土遺物としては、古相を示す遺物といえるだろう。ただし、この2点の施釉陶器をもって遺構の時期を確定させることには慎重にならざるをえない。施釉陶器が出土した層位はいずれも盛土層とみられる地層で、古い段階に埋没した遺物を含む地層を客土した可能性がある。SD06の掘削時期および埋没時期については若干の時間幅を介在させて捉える必要がある。

この問題を補完する資料として、3トレンチのSD06上位層（SD05）からまとまって出土したかわ

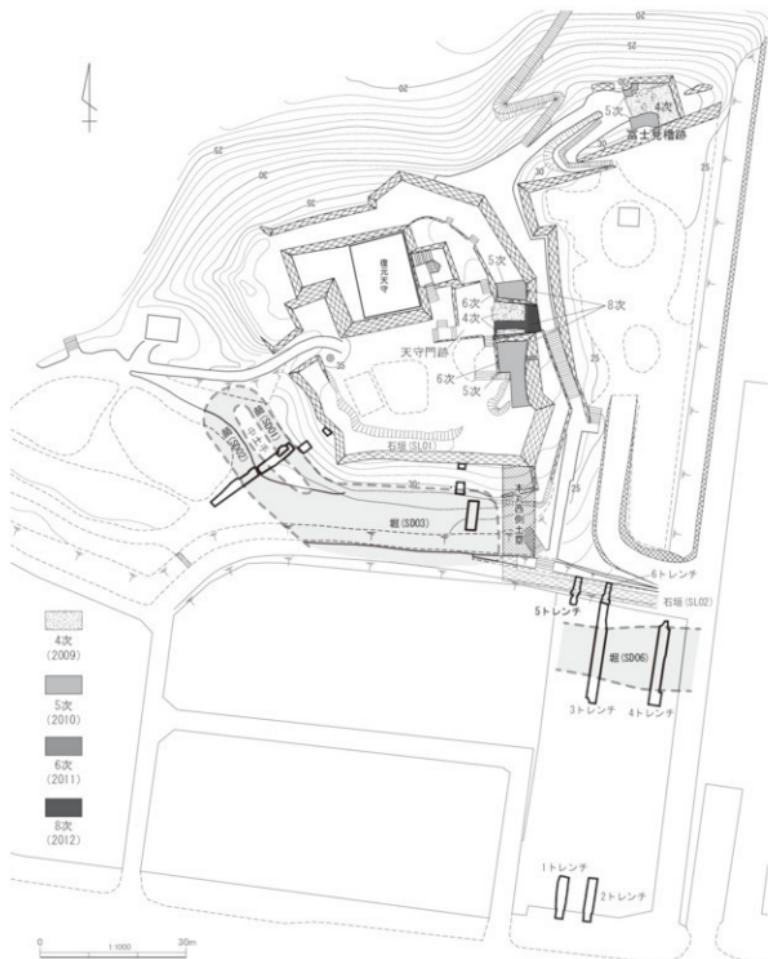


Fig. 31 発掘調査遺構推定図

らけ（18～22）に注目しておきたい。SD05はSD06の埋没過程（②層の上面）で形成された小規模な溝であり、SD06の廃絶時期を示す遺物といえる。これらかわらけは、いずれも非ロクロ成形のもので、直径は10.0～10.8cm、高さ1.6～2.2cmの大きさに集中する。

当地域におけるかわらけの変遷については、施釉陶器との共伴関係からおよその傾向が知られている（鈴木2002・2009）。大窯1段階から大窯2段階（15世紀末～16世紀中葉）に並行する時期のかわらけは口径差が顕著であり、非ロクロ成形品には口径7cm程度から14cmを超えるまでの多様性が認められる。口径の偏差が収斂するのは次の段階であり、大窯3段階に並行する16世紀後葉になると、口径10～11cm程度の大きさのものに限定されるようになる。以上のようなかわらけの推移から考えると、SD05から出土したかわらけの時期も大窯3～4段階に並行する時期のものとして捉えることが可能である。この解釈が妥当だとすれば、SD06が埋没した時期を16世紀後葉に近づけて捉えることも許されよう。

さらに、SD06の廃絶後、堀を人為的に埋め戻した②層や③層中に、石垣石材である珪岩の破片が含まれることも注目できる。珪岩は浜松城の近辺では産出せず、石垣構築のために遠方から搬入された石材である。浜松城における珪岩を用いた石垣の構築は、堀尾吉晴在城期（1590年～1600年）の頃と捉えられるので、②層や③層の形成時期を示唆する情報として評価しうる。

**SD06の時期** 浜松城の形成過程は、I期：今川氏の段階（16世紀前半～1569年）、II期：徳川家康の段階（1570年～1590年）、III期：堀尾吉晴の段階（1590年～1600年）、IV期：徳川譜代の段階（1601年～）の大きく4期に区分切ることができる。SD06は近世（IV期）の絵図には全く表現されていないことから、それ以前に廃絶したことが確実である。いっぽう、I期の今川氏の段階の城郭は引馬城（古城）とその周辺に限られることから、SD06のような大型の堀が本丸周辺に掘削されていたとは考えにくい。

SD06からの出土品にはI期に遡る時期のものが含まれるが、先述のとおり、SD05から出土したかわらけをはじめII～III期に降るもののが少なからず含まれるとみてよい。さらにSD06の廃絶時期を示す②層や③層には、III期以降の搬入品とみられる石垣石材（珪岩）が含まれることも考慮すべきである。

以上の情報から総合的に判断すると、SD06は、徳川家康の段階（II期）に掘削され、続く堀尾吉晴の段階（III期）、もしくはIV期の初頭に埋め立てられたと捉えることができる。

**SD06の評価** これまでに確認していた大窯3段階を中心とする徳川家康在城期の遺構や遺物はいずれも断片的であったことに対し（Tab. 3）、今回確認したSD06は本丸を巡る堀であり、城郭内の重要性は極めて高いものとして注目できる。徳川家康の浜松城普請は、元亀元年（1570）から始められるが、中でも天正6年（1578）頃を中心とした築城作業は大規模なものであることが知られる（『家忠日記』）。SD06の構築年代がどの程度絞り込めるか、繰り返しみられる築城記事との関連も今後、考慮すべきであろう（Fig. 33）。

Tab. 3 浜松城跡における大窯3段階の遺物を出土した主要地点

調査名	調査年	地点名	遺構名等	遺構詳細	出土遺物	文献等
—	1964	作左曲輪北方	作左山横穴	横穴	施釉陶器・かわらけ・内耳鏡	浜松市教委1996
7次調査	2011	御誕生場	SE01	井戸	磁器・施釉陶器・かわらけ・瓦	浜文振2012
11次調査	2014	引馬城（古城）	SX01	土器集積	染付・施釉陶器・かわらけ	2014年調査、未報告
12次調査	2014	清水曲輪	SD06	堀跡	施釉陶器・かわらけ・内耳鏡	浜松市教委2015（本書）
12次調査	2014	清水曲輪	24m+/-	遺構不明	施釉陶器	浜松市教委2015（本書）
12次調査	2014	西福城曲輪	7-3Nトレンチ	遺構不明	施釉陶器	浜松市教委2015（本書）

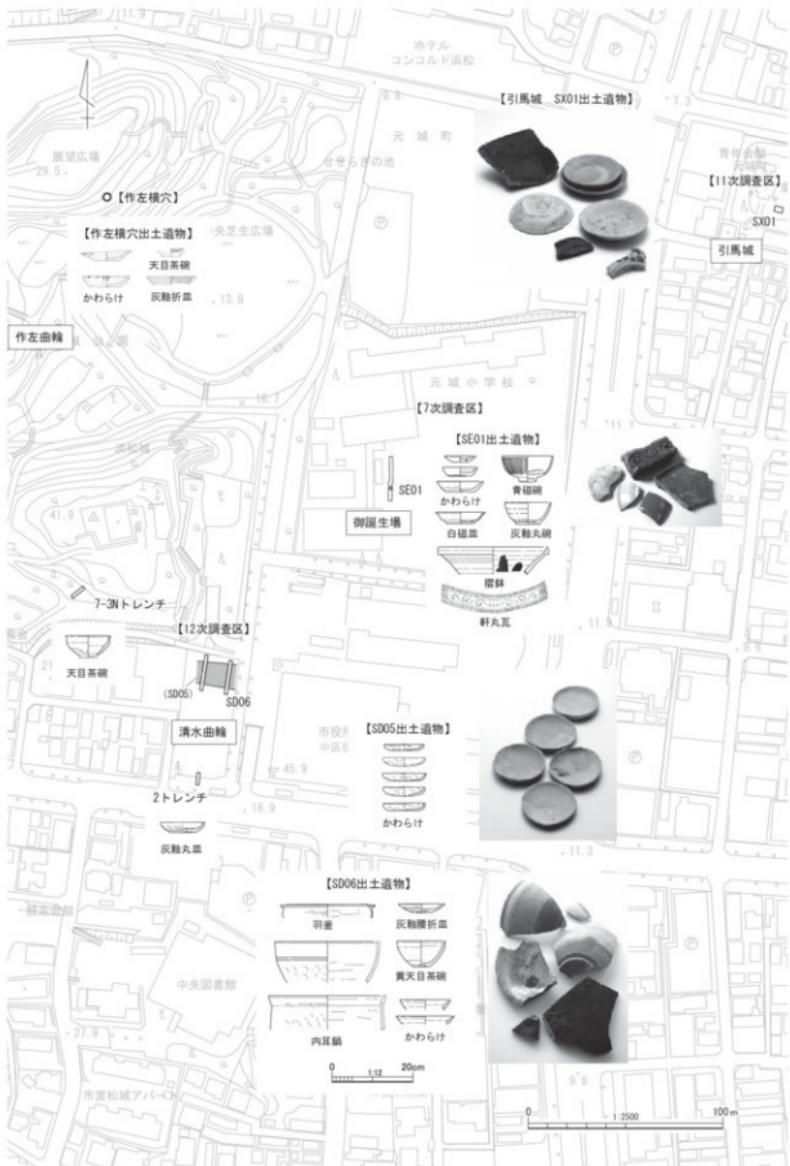


Fig. 32 浜松城跡 徳川家康在城期間連の遺構と遺物

西暦	城主	地域の 支配者	関連出土品	12次調査の成果	おもなできごと
1565	鍋尾茂遠・東遠 ・遠龍	今川氏			1560（永禄三）年 橋扶間の戦い
1570	徳川家康	徳川氏			1565（永禄八）年 今川氏真、姫尾遠龍を殺害 1568（永禄十一）年 德川家康、遠江に侵攻 1570（元和元）年 家康、浜松城築城開始
1580	(城代) 菅沼定政				1572（元和三）年 三方原の戦い、家康敗北 1578（天正六）年 浜松城修築(天正九年まで) 1579（天正七）年 岩山殿と信康を殺害・秀忠誕生
1590	堀尾吉晴・忠氏	豊臣氏			1586（天正十四）年 家康、秀吉の臣下となる 1590（天正十八）年 秀吉・家康に関門移封を命ず 1598（慶長三）年 秀吉没する
1600	松平忠頼				1600（慶長五）年 関ヶ原の戦い 1601（慶長六）年 家康、東海道に伝馬制を制定
1609	水野重仲				
1619	高力忠房				1616（元和二）年 家康没する 1619（元和五）年 德川宣、紀伊に移封される 1620（元和六）年 嘉永・諸大名に大坂城の修築を命ぜる
1638	松平乗寿				
1644					
1678	太田資宗・資次				1655（崇暦元）年 大風雨により、浜松城内に被害
1700	青山宗俊・忠雄 忠重				1675（延宝三）年 小天竜が應助堤により締切り
1702	本庄(松平) 貢俊・貢訓	徳川氏 (将軍家)			1680（延宝八）年 大風により、浜松城内に被害
1729	松平信祝・信復				1691（元和四）年 城内の屋敷で火災 1700（元和十三）年 城内の屋敷で火災 1706（宝永三）年 城内の屋敷で火災
1749	松平(本庄) 貢剛・貢昌				
1758	井上正経・正定 正甫				
1800					
1817	水野忠邦・忠精				1822（文政五）年 鉄門東橋を修理する
1845	井上正春・正直				1854（安政元）年 番年にかけて2度の地震で被害 1860（慶応元）年 天保川が氾濫し、城下に被害 1868（慶応四・明治元）年 戊辰戦争・明治と改元
1868					

Fig. 33 出土品の年代

徳川家康が築いた浜松城については、なお不明瞭な部分が多い。『武徳編年集成』によると、家康が築城した浜松城は、「本丸・二の丸・西羽曲輪・馬出曲輪・清水谷郭・三丸尉曲輪・鳥居曲輪」等とされる。近世浜松城でいう二の丸から本丸、天守曲輪、西端城曲輪、清水曲輪、そして作左曲輪にかけて拡幅を加えたとみてよいだろう。鳥居曲輪とは南側に張り出す出丸が相当するとみられる。馬出曲輪については該当する部分がみあたらないが、後の三の丸の拡張において消失した可能性がある。SD06以南の清水曲輪についても、大窓3段階の遺物が散見されることから、考古学的にも城内施設としての体裁を整えていた可能性が指摘できるようになったといえるだろう。

### 3 本丸南側石垣について

**本丸南側石垣** 本丸南側の石垣を調査した5・6トレンチからは擁壁内部において野面積みの石垣を検出した。この石垣が構築された年代は、珪岩を用いた石垣を導入した堀尾吉晴の段階（III期）とみることができる。検出した石垣の高さは5トレンチで2.46m、6トレンチで1.54mである。石垣上面は公園の園路の造成によって破壊されている。本来、本丸南側石垣の天端は水平で、近世には多聞櫓が建てられていたものと考えられる。

**本丸土塁の推定** この石垣の西側の延長部分が、1985年に西別館北側コンクリート擁壁補修に伴い確認されている（Fig. 34）。写真からの判読によると、石垣は9～10段分が残っているようであり、5トレンチよりも良好な遺存状態といえる。本丸南側石垣の西端は直角に折れ曲がり、土塁が天守曲輪に繋がる。現在、天守曲輪から南に僅かに延びる本丸西側の土塁が残存しているので、本丸南西側の大きさはほぼ確定させることができると見えるだろう。

**出土遺物の評価** 5トレンチからは、斜格子模様の軒平瓦（36・37）および、繋ぎ九つ目結い紋を象った軒丸瓦（39）が出土した。調査範囲が限られるが、これらは、当該部分の上部にあった多聞櫓に葺かれた瓦の可能性がある。斜格子模様の軒平瓦は浜松城跡の中でも出土例が限られたため、特定の建物のみに用いられた瓦であったと考えられる。なお、繋ぎ九つ目結い紋が用いられた時期は、本庄（松平）氏在城期（1702年～1729年、1749年～1758年）である。

### 4 天守曲輪石垣と天守曲輪をめぐる堀跡

**天守曲輪石垣** 7トレンチと8トレンチの上部において、天守曲輪石垣の根石を確認した。天守曲輪は鉢巻部分のみに石垣を用い、腰巻石垣はもたないことも明確にした。鉢巻石垣の基底部は南側の7トレンチで標高30.84m、西側の8トレンチで標高33.03mであり、南側から西側に向かつて2.2mほど上がっている。また、7トレンチにおいて石垣根石の外側に石垣と接しない石列が確認できた。この石列は構造的に現状の石垣と関わらないため、その性格は不明といわざるを得ない。



Fig. 34 1985年に確認した本丸南側石垣

**天守曲輪の瓦** 天守曲輪からは、堀尾吉晴の段階（Ⅲ期、1590年～1600年）に遡りうる瓦がまとまって出土している。具体的には軒丸瓦（51）と丸瓦（48、49、53）が相当し、天守曲輪の造営時期を示す遺物と捉えられる。また、近世の終わり頃の所産とみられる埴瓦（47、55）が一定量、認められることも注目してよい。天守門跡や富士見櫓跡の調査から明確にされているように、近世末の土塀の屋根には埴瓦が葺かれていたことが知られており、天守曲輪の南側、西側においても同様であることが追認できたといえるだろう。

**堀跡の特徴** 7トレンチと8トレンチの下部では天守曲輪をめぐる堀跡（SD01～03）を検出した。天守曲輪をめぐる堀については、17世紀後半の「青山家御家中配列図」等の絵図から、この堀が空堀であったことが明らかである。

7トレンチにおいて確認した空堀の上端幅は13.42m、最深部の深さは2.2mである。西端城曲輪側の空堀（SD01・02）は中土手をもつ二重構造であることが判明した。今後、中土手の平面的な広がりの追求が求められよう。

いっぽう、8トレンチにおいても空堀（SD03）の存在を確認したが、その規模が大きく、調査で堀の底面をはじめその詳細を明らかにすることはできなかった。現在、当該地は西端城曲輪と同じ高さに造成されているが、本来は空堀から清水曲輪に移行する斜面地であったとみられる。仮に清水曲輪平場（標高約19m）まで斜面地が続くと捉えると、天守曲輪南側石垣天端石（標高36.08m）との比高は約17m、土里端肩部（標高27.8m）との比高は8.8mという数値が得られる。天守曲輪の南側から清水曲輪にかけては、急勾配かつ高低差が大きい、極めて防御性の高い構造であった可能性がある。

7トレンチで検出したSD01とSD02の2条の堀跡と、8トレンチで確認したSD03との接続関係は不明である。中土手をもつSD01・02と、急傾斜で高低差が大きいSD03は、形状の差が大きく、性格が異なるものとみられる。近世の城絵図においても「青山家御家中配列図」のように、両者を一つの堀として描く場合もあるが、「遠州浜松城絵図」や「安政元年浜松城絵図」のように両者を二股状に描くものもあり、今後の面的な把握が望まれる。

**空堀の廃絶** 7トレンチで確認されたSD01・02は、西端城曲輪側から急激に埋められた様相が認められる。埋め立ては、中土手をこえてまとめて実施されている。堀の埋土に含まれる遺物には現代に降るもののが含まれることから、空堀が埋め立てられたのは20世紀中頃の比較的最近のことと考えられる。

8トレンチで確認したSD03の埋土も7トレンチと近似した様相が認められる。天守曲輪をめぐる空堀の埋め立て、平場の造成は広範囲に行われた可能性が高い。

#### [参考文献]

- 藤澤良祐 2007 「第1章総論」『愛知県史』別編 室業2 中世・近世 濱戸系 愛知県  
鈴木一有 2002 「戦国時代にかかる諸問題」『恒武西宮遺跡』(財)浜松市文化協会  
鈴木一有 2009 「北神宮寺遺跡における中近世の遺構について」『北神宮寺遺跡』(財)浜松市文化振興財团  
浜松市教育委員会 1996 『浜松城跡－考古学的調査の記録－』  
(財)浜松市文化振興財团 2010 『浜松城跡4次』  
(財)浜松市文化振興財团 2011 『浜松城跡5次』  
(財)浜松市文化振興財团 2012 『浜松城跡6次』  
(財)浜松市文化振興財团 2012 『浜松城跡7次』  
浜松市教育委員会 2013 『浜松城跡8次』  
浜松市教育委員会 2013 『浜松城跡9次』  
森田克行 1984 「畿内における近世瓦の成立について」『浜津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会

図 版  
PLATE





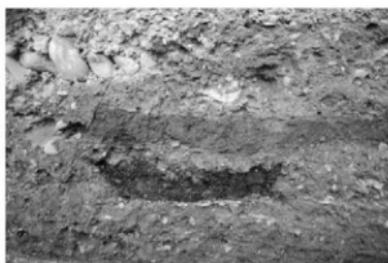
1 1・2トレンチ 完掘状況（北から）



2 1トレンチ 東壁断面（西から）



3 1トレンチ 東壁・南壁断面（北西から）



4 2トレンチ 東壁断面（西から）



5 2トレンチ 南壁断面（北から）



1 3トレンチ 堀 (SD06) 北岸 (南西から)



2 3トレンチ 堀 (SD06) 北岸と犬走り (西から)



3 3トレンチ 堀 (SD06) 南岸



4 3トレンチ 溝 (SD05) (西から)



5 3トレンチ 溝 (SD05) 出土かわらけ (北東から)



1 4トレンチ 完掘状況 (南西から)



2 4トレンチ 溝 (SD04)・小穴 (SP01) (南から)



3 4トレンチ 溝 (SD04)・小穴 (SP01) (西から)



4 4トレンチ 堀 (SD06) 北岸 (南西から)



5 4トレンチ 堀 (SD06) 南岸 (南西から)



1 5トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) (南東より)



2 6トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) (南西から)



3 7-1トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) (南から)



4 7-1トレンチ 天守曲輪南側石垣完掘状況 (南西から)



5 7-1トレンチ 根石と前面石列 (西から)



1 7-2 トレンチ 完掘状況（西から）



2 7-2 トレンチ 東側断面（北西より）



1 7-3N・S トレンチ 堀 (SD01・02) 完掘状況 (北東から)



2 7-3N・S トレンチ 堀 (SD01・02) と中土手 (西から)



8-1 トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) (南西から)



1 8-1 トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) 完掘状況 (南から)



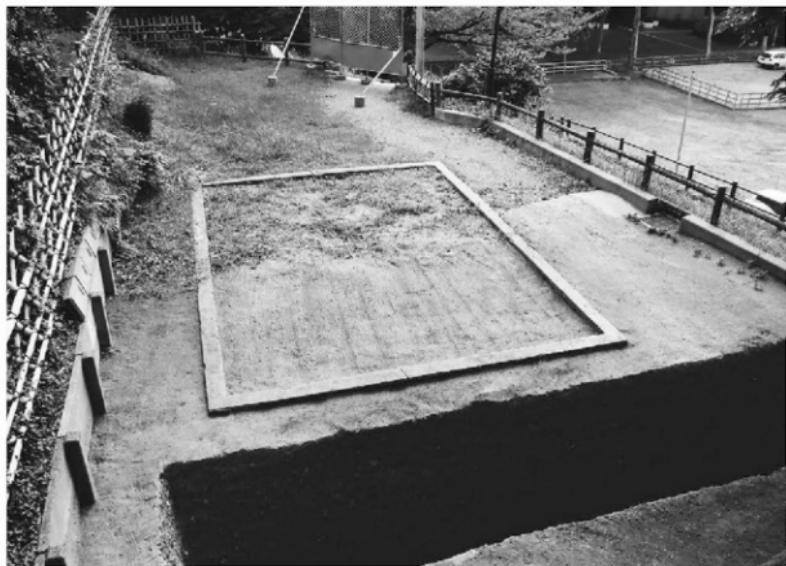
2 8-1 トレンチ 天守曲輪南側石垣 (SL01) 根石と東壁断面 (南西から)



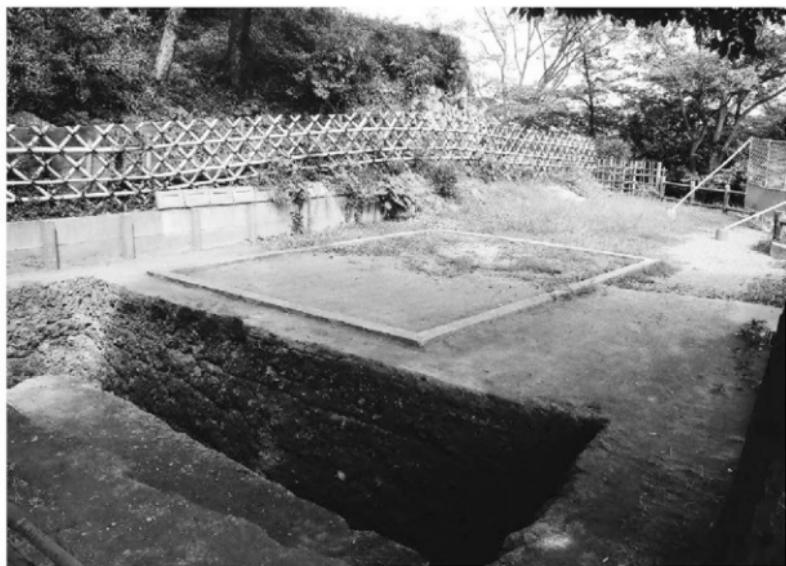
1 8-2 トレンチ 完掘状況（西から）



2 8-2 トレンチ 完掘状況（東から）



1 8-3 トレンチ 完掘状況 (西から)



2 8-3 トレンチ 堀 (SD03) 東壁断面 (南西から)



1～3トレンチ 出土遺物 (1トレンチ: 1～5、2トレンチ: 6～17、3トレンチ: 18～29)



4～8 トレンチ 出土遺物 (4トレンチ: 30～35, 5トレンチ: 36～39, 7トレンチ: 40～49, 8トレンチ: 51～56)

## 報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡 10 (はままつじょうあと 10)							
編著者名	鈴木一有、鈴木京太郎、辻広志（編）							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2015年3月10日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はままつじょうあと 浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元城町	22131	01-04-13	34度 47分 30秒	137度 45分 15秒	2014年 9月1日 ～ 10月27日	182m <sup>2</sup>	範囲 確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項				
浜松城跡	城跡	戦国時代 江戸時代	土師器 陶磁器 瓦	本丸南側石垣と堀跡を確認。天守曲輪南側石垣の根石と堀跡を確認。				

## 浜松城跡 10

2015 年 3 月 10 日

---

編集機関 浜松市教育委員会  
浜松市市民部文化財課  
(教育委員会の補助執行機関)  
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

発行機関 浜松市教育委員会  
印 刷 アインズ株式会社

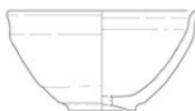
---



# Hamamatsu Castle

The 12<sup>th</sup> excavation report

A Report of Archaeological Inverstigations  
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka,Japan



March,2015

Hamamatsu Municipal Board of Education